

18世紀のアンドレイ・タタリノフ

露和語彙の研究

(第2部)

Исследование русско-японского лексикона Андрея Татаринова XVIII века (Часть вторая)

北村 一 親

0. はじめに

本稿は18世紀前後の約百数十年間にロシアへ漂着した日本人漂流民¹⁾に関して主に日本語資料²⁾の観点からまとめた北村2005の続編(本稿では標題の「語彙集」という名称を廃して、「語彙」とした)であり、18世紀の後半に盛岡藩(「南部」³⁾藩と通称する)の領民が漂流の果てにロシアの地に住み着き、その二世が当時、シベリア辺りで使われていた方言混じりのロシア語への対訳というかたちで父親から伝えられた日本語の書き言葉を仮名文字で書き記しただけではなく、話し言葉(即ち、当時の東北地方の方言的要素を多く含むと想定される言語)をロシア文字(キリル文字)で書き留めた露和語彙(本稿ではこの稿本の露和語彙を『タタリノフ(露和)語彙』と呼ぶ)の口語日本語を考察したものである。筆者は『名古屋・方言研究会会報』(2009年5月刊行予定)所載の拙稿にて『タタリノフ語彙』の日本語方言を考察したが、本稿はこれに第1章の「アンドレイ・タタリノフと「南部」漂流民について」を加えて増補・改訂したものである。

本稿で主に使用する文献資料に関する略語は次のとおりである。

Гонза, Лек. = 村山(編)1985。(頁番号で引用)

Лек. = Петрова 1962。(ロシア語欄を基準にして単語および会話文に筆者が順に附した項目番号で引用。単語以外はこの略語に続く括弧内に会話文 = разгов.; 字母 = азб.; 数詞および名数 = сч. を示して区別する。各項目を細分して示す場合は、ロシア語欄 = I; キリル文字に

-
- 1) 「その[漂流の]大部分が徳川幕府の鎖国期に発生している」(高野1971:200) ことの理由は北村2005:3-4にまとめておいた。
 - 2) 「ロシアの日本語研究は、日本の漂流民を日本語教師として始まった」(飛田1977:782中)のであり、アルパートフ1992:5-6はピョートルI世がデンバイДэнбэй(伝兵衛?)に「ロシア語を学んで日本語を教えるように」と下命した1702年1月8日をロシアにおける日本語教育の始まりとしている。
 - 3) 本稿では、この名称が固有名詞の際には鉤括弧を付けて、地理的な「北部、南部」という場合の普通名詞と区別した。

よる口語日本語欄 = II；仮名文字による文語日本語欄 = IIIを項目番号の後にハイフンでつないで示す。場合によっては原典の丁番号と表 = a / 裏 = 6をПетрова 1962に従って表示) Georgi = Georgi 1775. (頁番号で引用)
 Georgi(村山) = 村山1965 : 205-08. (頁番号で引用)
 北川 / 佐藤『レキシコン』 = 北川 / 佐藤1989. (頁番号で引用。各項目を細分して示す場合は、各欄を示す a から c までのラテン・アルファベットを括弧の中に入れて示した)
 村山「辞典」 = 村山1965所収の「[南部]方言辞典」(頁番号で引用。各項目を細分して示す場合は、各欄を示す A から E までのラテン・アルファベットを括弧の中に入れて示した)

原典資料に関する場合、ロシア語にせよ日本語(キリル文字表記と仮名表記)にせよ原典である『タタリノフ語彙』等の資料の表記をそのまま活字化して示す時は「二重のギユメ = « »」で囲み、原典のキリル文字による日本語を片仮名表記する時、あるいは原典のロシア語に対する現代語を示す時は「パーレン = ()」の中に示し、何れの場合も語義は「一重のギユメ = < >」で囲んだ日本語で示すことにする。

1. アンドレイ・タタリノフと「南部」漂流民について

日本の漂流民を記述した初出資料を示す時には北村2005においても行ったように、開国前後に情報が多く入ったため、通例ならば、明治17(1884)年に外務省が編纂した『外交志稿』または江戸幕府編纂の『通航一覽』を用いるのであるが、本稿で扱う「南部」漂流民、竹内徳兵衛一行の場合は既に江戸時代において早くから複数の日本の文献に彼らの事件が記載されている。ここでは後に『タタリノフ語彙』における日本語方言も問題にするので彼らの出身地を確かめながらアンドレイ・タタリノフと「南部」漂流民に関する記事、特に漂流に至る経緯および当該の露和語彙との関わりを見てゆくことにする。

北方で諸々の情報を得ていた最上徳内は『蝦夷草紙』に次のように記述している。(近藤重蔵の旧蔵本で、現在「正斎遺書」として東京大学史料編纂所の所蔵となる寛政10(1798)年の徳内自筆本に拠る)

「勝右衛門漂流の事 奥州南部領佐井村の竹内徳兵衛といふ者、手船に乗組、十七人にて千式百石積の新艘、延享元子年十一月十四日、佐井の湊を出帆して、難風に遇ひ、北方に漂流して、赤人国に到る。徳兵衛が親類にて勝右衛門と云者、同領奥戸村伊勢屋安兵衛親類にて利八、同領大間村の長松、同所宮古港の伊兵衛・長助等以上五人、存生のものありて、赤人国の土人となり、五人は各諸所に住居す。」(吉田(編)1965 : 133)

最上徳内のこの記述に関して岡本柳之助は「勝右衛門ノ事」という件の中で「最上徳内常矩、嘗テ南部ノ老人ニ問フ、徳兵衛等延享元年甲子年、佐井ヨリ出帆シテ、再ヒ國ニ歸ラスト云」(岡本(編)1898 : 56-57)と記している。

また、日本へ帰還した漂流民からの証言も当時としては貴重な情報源であり、この「南部」漂流民に関しては若宮丸の石巻漂流民たちを大槻玄沢および志村弘強が聞き書きした『環海異聞』(文化4(1807)年序)に次のような記事がある。

「イルコーツカの墓所に竹内徳兵衛と彫付たる石塔あり。又享保十 支干漣滅 年何々と彫りたる日本字の石塔もあり。是等の類にや。按に光太夫か記に田名部の辺、佐井村久助といふもの、よし。又案に南部奥戸竹内徳兵衛手船、延享某の年漂流して彼地へ至り留りしと見ゆ。久助とやらんは此人数の内なるへし。」(杉本(編)1986:100)

ここで言う「田名部」とは下北辺りの総称であり、必ずしも田名部の街里のみを指すものではない。

竹内徳兵衛の地元近辺ではさらに詳細な情報が江戸時代に記録されている。寛延元(1748)年に生まれ、文政4(1821)年に死去した大畑の村林源助(名は時明、源助は通称)は若い時からの見聞(記事としては寛永5(1628)年から文政元(1818)年)をまとめた『原始謾筆風土年表』を残した。そこには、

「延享元年甲子 ㊦ 佐井竹内徳兵衛多賀丸に佐井勝右衛門奥戸利八大間長松宮古伊兵衛宮古長助等の十六人乗大豆昆布鱒糟千二百斛大畑浦にて積入霜月十四日出帆たりしか魯細亞へ漂着船中に武鑑節用等も有しとそ然しより日本の豊饒たるや寒暖過不及なく沃野千里民穩に人肥たるを羨慕ひ後年に至て通船互易の望此時よりや芽しけん」(青森県文化財保護協会1960:47)

とある。これによって船名や積荷の詳細を知ることができる。なお、源助の在所である大畑は下北の中心地である田名部と湊町の佐井を結ぶ交通の要所の一つである。(同3)

これら日本側の記録に対し、⁴⁾一方のロシアでは18世紀の初めから他の漂流民も含め記録が少なからず残されているが、まずは『タタリノフ語彙』自体から情報を得ることにする。Dostojewsky 1930:126—27においてこの手稿本の標題紙にある「頭文字と標題、そして1782年10月24日の学士院会議録から判断して」(„Nach den Initialen und der Überschrift des Lexikons, sowie dem Akademischen Protokoll vom 24. Oktober 1782 zu urteilen“)イルクツクの日本語学校の生徒、アンドレイ・タタリノフによって書かれたことが示された。⁵⁾ドストイェフスキの記述はこれだけなので、もう少し詳しく原典を見てみると、確かに『タタリノフ語彙』の標題紙の次頁(Лек., л.2a)の欄外にフランス語で«prés[.] : à la Conference [sic] 24 October [sic] : 1782»、1782年10月24日、会議に提出」と走り書きがあること、標題紙の下方には頭文字«A T»と(ニポンノヒト サノスケノ ムスコ サンパチ ゴサリマス)という仮名文字による文言が確

4) 木崎1991:39-40では他に二、三の日本側記録を挙げている。ただ、木崎はイルクツクの日本語学校の「残った漂民教師5名は、1773年頃、簡単な『日本語単語集』『日本語会話集』を編集するなど、ロシア人の日本語学習に貢献した。なお三八は、この『日本語単語集』を基礎として、『レキシコン』と呼ばれる露日辞典を編集した」としているが(同39)、『タタリノフ語彙』がこの先行する語彙を基礎としたかどうかは不明であるだけでなく、これらの著作自体の確認もできていないのである。

ちなみに、『外交志稿』巻之十四の該当箇所を次に示しておく。「桃園天皇寶曆三年癸酉西曆一千七百五十三年 陸奥鹿角郡ノ船頭徳兵衛水主十六人ト東察加ニ漂着ス洋中ニ溺死スル者十人殿奥村利八ナル者アリ土人ノ女ヲ娶リ露語ヲ學テ我邦ノ通詞トナル勝右衛門ナル者尼古斯科[ルビ:イルコスギ]ノ吏ト爲リ一男ヲ擧ク領主名ヲ命シテ「イタラレヤンセイチャ」ト稱ス後十七年一船ノ長トナリ西方ニ航シ樺太島ニ至リ土人ノ爲ニ殺サル 北海鳥船記 通航一覽」(外務省1884:420-21)

5) 村山1965:134ではこのDostojewsky 1930を「『レキシコン』 [=『タタリノフ露和語彙』] を最初に学界に紹介した」研究とするが、これは誤りである。これより以前から『タタリノフ露和語彙』は知られていたのである。

認できる。その後、オリガ・ペトロワが1960年の第25回国際東洋学会議での発表（会議録論文集はПетрова 1963で、これはПетрова 1962より内容的に新しい）およびПетрова 1962: 4—11においてロシア側の日本人漂流民に関する資料から『タタリノフ語彙』の来歴を明らかにした。考察の出発点も帰結点もドストイェフスキと同じであるが、ペトロワは著者解明の過程を細かく記している。前述の1782年10月24日の学士院会議録は「10月24日、月曜。出席者：[略。ただし、後に触れる問題に関して極めて重要な人物も列席しているので注意を要する]」（“24 Octobre, Lundi. Présents : Messieurs les Académiciens de Stehlin, Kotelnikoff, Roumovsky, Pallas, Protassov, Lepechin, Krafft, Lexell. Messieurs les Adjoints : Georgi, Fuss, Hackman. Sectétaire [sic] J. A. Euler, Académicien.”）（Петрова 1962: 4）で始まる。そして学士院委員会がイルクツク県知事クリチカの依頼により提出させた文書等の中に「学徒アンドレ・タタリノフによる日本語辞典」（“Un Dictionnaire Japonais, par disciple André Tatarinof”）（там же）が見出せるのである。このアンドレ（イ）・タタリノフが当該の露和語彙の著者であり、「日本人サノスケの息子、サンパチ」ということになる。

次に「サノスケ」の解明となるが、エスフィリ・ファインベルクはロシアの海軍文書館の18世紀の文書をもとに「南部」漂流民のロシア漂着からその後の日本語教育に関するまでの記録をまとめている。（Файнберг1960: 32—34）彼らの漂着の件は翻訳すると次のようになる。⁶⁾

「エツォ [«Эдзо» <蝦夷>] 島から材木、干した魚、魚油を積荷としてインド [«Индо» <江戸>] 市に向かった日本の船が1745年春にクリル列島の第五島（オンネコタン島）付近で難破した。船員6名と船長トクベイ [«Токубэй» <徳兵衛>] が非業の死を遂げ、残りの10名の者が岸に下船した。」（там же, стр. 32—33）

また、ペトロワはその当時、イルクツクに住んでいたミハイル・タタリノフという二等少佐が書いた『当節、イルクツク市に滞在せる日本人の知識に就きて』О знаниях японцев, которые находятся ныне в городе Иркутске という文書に基いて「サノスケ」に関する考証を行った。（Петрова 1962: 9—11）

「商人タンベ [«Танбе»] の所有するタノ-マル [«Тано-мару»] は、食料品を主とした色々な品を積み、17名の乗組員で1744年11月24日、日本の首都、エドへ向けて出発した。途中で嵐に会い、マストや舵を折った。操船不能となって船は長期間、風や潮流にまかせて波間を漂った。1745年4月13日、乗組員は船を棄てて、小船で何とかして岸にたどりつこうと試みた。1745年5月16日、クリル列島の第五島に小船が打ちつけられた。」（там же, стр. 9）

ペトロワ所引のミハイル・タタリノフ資料によると、その後、上陸した漂流民たちはロシア人に遭遇してカムチャツカのポリシェレツク要塞に送られ、そこでキリスト教の洗礼を受けた。その中に「イワン」Иванという名前を与えられた「サ(ン)ノスケ」«Санноска» (サンノスキヤ)⁷⁾ という人物が見出せる。また、生存した10名の漂流民のうち5名はロシア語を学ぶため1746年にペテルブルクに送られ、そのうち2名が死亡し、残りのスウィニイン、パノフ、チェルノイの

6) 口語日本語のキリル文字転写において、ア行、ヤ行、ワ行および「ツ」以外の下付き仮名文字は閉音節の音節末子音または音節頭位の子音連続の第1子音を表す。

3名は1753年にイルクツクに送られた。ボリシェレツクに残留した5名のうち1名が死亡し、残りのポポフ、タタリノフ、アフアナシエフ（・セミョノフ）、トラベズニコフ⁸⁾の4名は1747年にヤクツク、そして1755年7月30日にイルクツクに送られた。

ミハイル・タタリノフは、これらイルクツクの日本人に関して次のように記録している。

「前記の日本人たちのイルクツク滞在中に何人かの徒弟たちは、日本語会話を教えている。何人かは日本語で会話し、同じく書くことも翻訳することもできる。」（Петрова 1962：10）

ペトロワは他の古文書からイワン・イワノウィチ・タタリノフ Иван Иванович Татаринов という日本人がイルクツクへ移された日本語学校にいた4名の日本人の中の一人であったことを確認した上で、以上のことを総合して、日本人「サノスケ」というのはロシア名をイワン・イワノウィチ・タタリノフと言う漂流民であったことを明らかにした。当時、ロシアで洗礼を受けた日本人たちは全て航海士または企業主の姓が与えられたのである。（Петрова 1962：10—11）

一連のアンドレイ・タタリノフと彼による露和語彙に関する研究は村山七郎によって総括されたと言って一応、よいであろう。村山1965は国内資料のみならずロシアの資料をも精査し、「南部」漂流民の地元（船長、竹内徳兵衛の在所）である佐井での調査も行って、上記の資料を補った。その結果、船長は船問屋二代目竹内徳兵衛であり、伊勢屋ではないことや彼らの日本名とロシア名との対照等々の興味深い彼らの経歴等を明らかにした。また、イルクツクの日本語学校の基礎が18名の日本人が乗っていた船であり、1772年当時でも5名が生存していたということをベテル・パラス Peter S. Pallas のシベリア調査団に参加したヨハン・ゲオルギ Johann G. Georgi が著した『1772年におけるロシア国旅行覚書』 *Bemerkungen einer Reise im Rußischen Reich im Jahre 1772* に見出した。⁹⁾

村山の『タタリノフ語彙』の言語の考察に関しては後述するが、推理小説にも比することができる村山の「南部」漂流民に関する論考は是非、直接に読んでもらいたいので本稿では上記の二三の要点のみに止める。また、イルクツクの日本語学校に関しても色々な研究があり、村山

7) 筆者は、アンドレイ・タタリノフやその父サ(ン)ノスケ、そして他の「南部」漂流民の言語に「シラビーム方言」的特徴を想定するので、このように表記した。かつて、金田一春彦は、テレビ番組に出演した折、父祖の地が岩手県盛岡市であり、その近郊にある「金田一」（現二戸市）という土地を訪ねて土地の者の発音を聞いたところ「キ・ン・ダ・イ・チ」ではなく「ツィン・ダ・ツイ」であったと言っていた。まさに『タタリノフ語彙』の言語もこのような言語であったであろうと筆者は推定する。また、ゲオルギの資料にはラテン文字で“Sanoske” (Georgi, 13) とある。

8) モスクワで古文書を調べた結果を報告したペトロワの村山宛の私信（村山1965：151-52）により補正した。なお、このペトロワの書簡はアンドレイ・タタリノフがおそらく1752年生まれで、1765年に父親イワン・タタリノフが死亡、その同年、日本語学校にアンドレイが入学していることを明らかにした。

9) 村山1964には同書の該当箇所の翻訳があるが、やや正確さに欠けるので、関連する冒頭部分を筆者による訳で以下に示しておく。

「この〔イルクツクの日本語〕学校の契機は18人の日本人が乗り込んだ日本船にある。米、亜麻布そして絹織物を積み込み、同国の他の港へ行くことと日本の都市サイから出航したが、針路を失い、12月29日には帆柱とヤードを失い、運を天にまかせて漂流し、クルルの島アンニカタンAnnikatanの近くの岸に行き着いた。」
„Die Veranlassung dieser Schule gab ein mit 18 Japanern bemannetes Japanisches Schiff. Es lief mit Reiß, Leinwand und seidenen Zeugen befrachtet von der Japanischen Stadt Sai aus, um einen andern Hafen des Reichs zu besuchen, verlor aber den Cours und den 29sten December Mast und Rah, daher es auf gut Glück trieb und bey der Kurilischen Insul Annikatan auf den Strand gerieth.“ (Georgi, 3)

なお、ゲオルギが述べるイルクツクの日本語学校に関しては、Сгибнев[ъ] 1868参照。

も別に論考をまとめているが、これらも割愛する。

これらの内外の議論において、特にロシア語で書かれた古文書における筆記体のキリル文字を判読する際にいくらかの誤りがあった。乗船した船名「多賀丸」や船主「(竹内) 徳兵衛」といった名称にその変転の様子を見て取ることができる。

ペトロワは、Петрова 1962 : 9においてミハイル・タタリノフからの引用ではあるものの、“Тано-мару” (タノ-マル) および “Танбе” (タンベ) としていたが、Петрова 1963 : 364では“Тана-мару” (タナ-マル) および “Токбе” (トッベ) とより正確になっている。村山1963a : 65下では「Tanbe [多兵衛か? [原注]]」および「Tano-maru」, 村山1963c : 94aでは「タノ丸」(多賀丸) および「Takbeタクベ」(徳兵衛), 村山1965では「多賀丸」および「徳兵衛」となっている。村山1963c : 94a (および次に述べる徳川宗賢については村山1965 : 150, n. 6も) によると徳川宗賢は「三之助」が「竹内徳兵衛一行」であろうと1963年4月の段階で気づき、また高野明も同年7月の村山宛私信で同様な考えを述べたという。¹⁰⁾

2. 資料 — 『タタリノフ露和語彙』

本稿の資料となるのは、漂流民二世であるアンドレイ・タタリノフ Андрей Татариновが残した露和語彙“Лексикон” русско-японскийである。標題紙(Лек., л.16)の第1行めに文の冒頭である「レクシコン」“Лексикон”(邦訳すると「辞書, 語彙」という語が大書してあるため,¹¹⁾そのまま『レクシコン』と称されることもあるこの露和語彙を本稿では『タタリノフ(露和)語彙』と呼ぶことは既に述べた。この資料は18世紀当時のロシア語の書法で、かつ筆記体も交えて書かれているため、慣れないうちは判読に戸惑うことしばしばである。例えば、村山1963c : 89aにおいて、「ロシア字書きは、ロシア文でも日本語でも必ずしもたやすく読めるというわけではない。たとえば(32 [Лек.(разгов.), 33]) Война есть людем (ママ [原注]) вредна。(「戦争は人々にとって有害である」)と書いてあるところなど、ペトロワさん [後出] がВойна будет вредна。(「戦争は有害だろう」)と誤解されたくらいであって、ロシア人学者にとっても[ロシア語の部分の解説すら] 解説がたやすくないところがあるようである」とあり、また、筆者が詳しく見ていくと、例えば、日本語字母表である「いろは」のうち「ひ」に当たる口語日本語をキリル文字表記したものをペトロワは«фя»(Петрова 1962 : 14)と解説しているが、これは原典の写真版(Лек., л. 49a)を注意深く見つめると«фи»と読むべきであるというようにこの原典資料の判読には、やや特別な経験と知識が必要である。¹²⁾

ここにこの『タタリノフ露和語彙』の標題紙(Лек., л. 16)を当時の書法のまま筆者が活字化したものと、Петрова 1962を参考にして現代標準語に修整したものとを示しておく。

10) 筆者が見たПетрова 1962の或る古書には、同書第9頁の“Тано-мару”に「多賀丸」と万年筆(推定)による書き込みがあった。これが村山1965を見ての所為でないことは、「Танбе」に対しては「田名部」との書き込みがあることから判る。この書き込みの脇には「岡本, p. 57」とあるが、これは岡本1898 : 57のことであり、まさに「勝右衛門ノ事」の件の箇所である。旧蔵者の慧眼に敬服する。ちなみに、この古書の標題紙の右上方に“Такано”とキリル文字筆記体で、かつ頭文字“Т”の書き出しがタタリノフの書体のように装飾された洒落たサインがあった。古き良き時代の「学識」と「洒落」を垣間見た思いがする。

11) 内容的には「序文」と考えてもよいが、体裁から考えて、一時代前の形式を模倣した標題と考えるべきであろう。ここでは現代ロシア語形で示した。

«ЛЕЖИЖИКОНЪ | имянуется Пояпонскій Нипо|нно кодобанъ ; азбукѣ, ѣтъ, съ | переводомъ
россійскимъ, аонной | переводъ наименованъ лѣтерамѣ | японскѣмъ ; очемъ ѣможетъ |
благодарный читатель за^бла|го разсудя дойти достепеня | ѣпредузнуть вчембы состояло
по|ложение иностраннаго деалекта | сея кнѣгѣ ; / |

ноя пользуясь темъ сиеуспѣнейшимъ ожѣ|данѣемъ ; ежели оная прѣнята будетъ |
от^тчеловека прѣисполненнаго добродетельв ; | ѣпочтется хотя несколько клябопытству |
занадо^бное ; россійскому всеобществу ; | ѣотемъ посвятѣться мой сусердностѣю | ѣнѣжайшей
прѣпереводѣ тру^д ; ѣподасть | случай кѣнайвящему раченѣв моему въ | прѣдбудущее время ; / |
итако впереводѣ сей кнѣги |

にほんの | ひと さの | すけの | むすこ | AT | さんばち | こ | さり | ます

[縦棒線は原典の改行を示すため筆者が挿入。日本語は縦右書き。]

「AT」はアンドレイ・タタリノフの頭文字

(ЛЕКСИКОН именуется по-японски Нипонно кодобан; азбуки, и счет, с переводом
русским, а онный перевод наименован литерами японскими; о чем и может благодарный
читатель за благо рассудя дойти достижения и предузнать в чем бы состояло положение
иностранного диалекта сия книги;

но я пользуясь тем неуспѣнейшим ожиданием; ежели оная принята будет от человека
преисполненного добродетели; и почтется хотя несколько к любопытству за надобное;
русскому всеобществу; и о тем посвятится мой с усердностью нижайшей при переводе труд;
и подаст случай к наивящему рачению моему в предбудущее время; и тако в переводе сей
книги

ニボンノヒト サノスケノ ムスコ AT サンパチ ゴサリマス)

原典最下段の日本語文における「ほ、ば」は半濁音「ポ」、「パ」を、「こ」は濁音「ゴ」を表している。これはロシア語原文中の日本語「Нѣпонно [кодобанъ]」（ニボンノ [コドバン]）日本の[言葉]」というキリル文字表記からも窺い知ることができる。

この題辭を要約すると、「この語彙は、日本語で「ニボンノ コドバン」と呼ばれ、字母「[いろ

12) この「ひ」を村山1965:200では、筆者と同じく«фи»としているが、ベトロワの解説に対する何らのコメントもなく、おそらく村山は原典批判を行わず、「いろは」であるからという単純な判断で活字化したものであると考えられる。その理由を挙げれば、この箇所の筆記体はベトロワの読んだように«фя»とも読めるからである。「И»とも«я»とも読める判読困難な文字を他の箇所に現れる同様な多くの字体から読み解くという根本的な操作を怠ってはならないのである。『タタリノフ語彙』のキリル文字は（他のキリル文字の手書き文書よりは活字的に書かれた文字も多く、それ程ではないにせよ）多くの判別し難い文字があり、例えば、「и (й), к, н, п, я」などはどれも同様の筆記字形をしているため、解説が難しい。ロシア人留学生もこのタタリノフの«я»に似た«и»には当惑した様子であった。

江口2006:49-50において『タタリノフ語彙』が引用されているが、残念ながら誤読をしているのである。例えば、「вадагушрано»(ワダグッラノ)«私たちの»(Лек., 531-II)の最初の文字«в»を«б」と、「доккара кймашта»(ドッカラ キマシタ)«どこから来ました»(Лек., 626-II)の«ш»を«щ」と誤っている。前者は文字上部の内側への丸めを注視すべきである。江口2006はゴンザの辞典を論じた著述であり、著者も筆記体のロシア文字には慣れているはずであるが、『タタリノフ語彙』の文字は小さくて判別しにくい場合も少なくないので、その解説には、些かの熟練を必要とする。

は]のこと], 数え立て [すなわち, 数詞や名数] から成り, ロシア語訳が付いており, 日本語は日本の文字 [「仮名」] でも表記されている。本書によって外国の言葉 [「деалект」] の事情が判るのであろう。(以下略) となる。

この「*кодобань*」(コドバン) <言葉> という日本語はこの露和語彙が書かれた日本語の方言, 即ちタタリノフの日本語に基づくものではないと筆者は考える。この語は先行する出色のロシア語・日本語辞典である『スラヴ語・日本語新辞典』*«Новый лезиконь славено японский»*, すなわち通称『ゴンザの辞典』(1736年から1738年の間に薩摩の漂流民ゴンザによって書かれたもの)の日本語標題, *«Ника лезикончь славено нифонно-котобанть»* (ニカ レッシコンチェスラヴェノニフォンノ-コトバント)¹³⁾にある「*котобанть*」(コトバント)の最後の子音を除去し, 語中閉鎖子音の有声化というタタリノフの方言的特徴を加えながらも踏襲したものであろう。つまり、『タタリノフ語彙』における日本語標題の相当部分は薩摩方言を無意識に借用したものであることを指摘しておきたい。タタリノフはこれが「辞典」という意味の日本語での正式な名称だと理解(誤解)していたのであろう。因みに, 「日本」という語は『タタリノフ語彙』において前述のように「*Нйпон-*」(ニボン)という無声閉鎖音 [p] を有する語形と「*Нйфонь-*」(ニフォン) (Лек.(разгов.), 17)という無声摩擦音 [ф] を有する語形の記述があり, 後者が『ゴンザの辞典』の流用でないと仮定すれば, 発音が揺れていると言えるが, 筆者としてはいまま少し慎重に結論を出したい。

『タタリノフ露和語彙』の本文の構成は次のとおりである: 標題 16; 項目А л. 2a — 26 (以下, 「項目」および「л.»を省略); Б 26 — 56; В 56 — 8a; Г 86 — 10a; Д 10a — 11a; Е 116 — 12a; Ж 126 — 136; З 136 — 16a; И 166 — 17a; К 176 — 20a; Л 206 — 22a; М 22a — 24a; Н 24a — 26a; О 266 — 28a; П 28a — 306; Р 31a — 326; С 33a — 356; Т 36a — 37a; 8 = У 376 — 39a; Ф 39a — 396; Х 40a — 406; Ц 406 — 41a; Ч 416 — 426; Ш 43a — 436; Я 436 — 44a; (白紙) 446; 会話 45a — 486; 字母 [「いろは」のこと] 49a; 数え立て [すなわち, 数詞や名数] 496 — 51a.

次の図のように各項目が横に3欄からなり, 単語部では大略, 1語で1行1項目を, 会話部では大略, 1文で1項目を形成している。

I欄	II欄	III欄
«Пороссийски» (по-русски) <ロシア語で> [ロシア語]	«Пояпонский» (по-японски) <日本語で> [キリル文字による口語日本語]	«(i) Лйтерамй» ((и) литерамй) <(そして) 文字で> [仮名文字による文語日本語]

I欄のロシア語欄に対応するII欄のキリル文字による口語日本語やIII欄の仮名文字による文語日本語が全てにわたり記述されているわけではない。全51丁のうち43丁を占める単語部で

13) 『ゴンザの辞典』の標題は村山(編)1985の口絵写真(裏)にある同辞典冒頭より筆者が活字化した。日本語の部分は村山によると, 「新かレクシコンと[言うもの[原注]]スラヴ・日本の言葉=スラヴ・日本語新かレクシコンと言うもの)」の意味である。(村山(編)1985:5) なお, 『スラヴ語・日本語新辞典』という訳は「新スラヴ語」という名称(言語名としては実在しない)との混乱を避けながらロシア語原文を表現することに留意しながら筆者が工夫したものである。

は、I欄のロシア語欄を基準として全973項目（うちЛек., 18-Iは頭文字のみ）から成るが、¹⁴⁾ II欄は空白となって欠落している38項目（上記Лек., 18-Iに対応するЛек. 18-IIを含む）および誤って仮名文字表記をしている1項目（Лек., 2-II）を除く全934項目、III欄は空白となって欠落している55項目（上記Лек., 18-IIに対応するЛек., 18-IIIを含む）を除く全918項目となっている。会話部ではI欄のロシア語欄を基準として全51項目から成り、II欄のキリル文字による口語日本語は全49項目、III欄の仮名文字による文語日本語はЛек.(разгов.), 18以降の記述が全くなく、全16項目である。また、II欄、III欄の対応語の全てがI欄のロシア語に正確に対応しているわけではなく、一部に誤解等による齟齬も見られる。

単語部において基準となるI欄の配列順序は各項目の単語（連語の場合は最初の語）の頭文字によってのみキリル・アルファベット（アズブク）順に「分類」されているだけで、各語の第二文字めからは順不同である。頭文字として分類されるアルファベットの数も同音異字をまとめて25文字に抑えられている。

II欄の「口語日本語」というのは、その内容を一瞥すれば判るとおり、また、村山1963a: 75, n. 3や北川 / 佐藤1989: 149も指摘するとおり純然たる日本語方言ではなく、当時において、そして、記述者アンドレイ・タタリノフの父親を始めとする漂流民たちが活動していた日本の（諸）地域において当事者たちが規範とみなすような口頭で発現された音声日本語を単音表音文字で書き留めたものであるが、この中に少なからぬ数の方言的あるいは地域の特徴が見られ、本稿ではこの言語を「東北方言」と汎称する。『タタリノフ語彙』は、このように単音表音文字で記され、規範的な書法から切り離されているため、18世紀の東北方言の音声を記録した貴重な資料となるのである。

北川 / 佐藤1989: 150で「露語日本語音訳を先に行っていたと思われる。それらがある程度終了した段階で、仮名表記（漢字仮名まじり文訳）[...]を書き加えた形跡がある」と「予想」しているが、まさにそのとおりで、彼らが『タタリノフ語彙』を復刻するに際して底本としたペトローワ編著の序文（Петрова 1962: 12）に「二つの欄はより濃いインクで、三番目はより薄いインクで書かれ」という解説があり、I欄およびII欄とIII欄は別個に書かれたものである。

研究文献としては、原典の影印としてПетрова 1962があり、日本語方言（東北方言）の詳細な論考も含む文献学的成果をまとめた見事な序文が付されている。村山1965はオリガ・ペトローワのタタリノフに関する一連の研究に刺激を受けてまとめたものである。おそらくこの二書によって『タタリノフ語彙』に関する研究の重要な基礎が形成されていると言っても過言ではない。これら以外には、前述の北川 / 佐藤1989にПетрова 1962の写真版を縮小した影印がある。

Петрова 1962は帝政ロシア時代以来の良き文献学的伝統に裏打ちされた著作で、ロシアの古文書や18世紀の刊行物を資料に研究を進めるという日本人学者には手の届かない領域における所産である。著者、というより“Издание текста и предисловие О. П. Петровой”とあるように、テキストの出版と序文の執筆を行ったオリガ・ペトローワ・ペトローワ-コルシュノワ Ольга Петровна Петрова-Коршунова（1900—1993）は1900年に奇しくもタタリノフと深い所縁のあるイルクツクで生まれ、日本語や韓国・朝鮮語で書かれた古文書の文献研究に従事した研究者である。¹⁵⁾

14) Петрова 1962: 12には“Словник «Лексикона» содержит 977 слов”「この『語彙』は見出語として977語を収録している」とあり、また村山1965: 131には「977のロシア語単語を大略的にアルファベット順に配列し、[...]（43のロシア語単語には日本語がつけてない）」とある。それぞれの著者が用いる計数方法および“слово”あるいは「語」の意味が不明であるが、おそらくこれらは間違いである。

村山1965は、村山1963a, 村山1963cに続く「ロシア・ソ連邦」(村山1965: IV)に残された日本人漂流民の言語資料に関する村山七郎の研究のこの時点における総括である。「III. ロシアに伝わる18世紀前半の南部方言資料」(村山1965: 129-204)が本稿で扱う『タタリノフ露和語彙』の論考となっている。ただし、この研究における村山の目的は「[南部]方言辞典」を作成することであり、「原書はロシア人のための露日辞典であるが、本書は日本人のための南部方言辞典である」(同132)という宣言にも似た村山の言葉からも彼の情熱が伝わってくるのである。¹⁶⁾ 村山の「[南部]方言辞典」を筆者が説明するならば、各項目が次に示す表の上段のような構成になっている。この表の下段は原典(Петрова 1962収録の影印版)の項目の各欄との対応を示したものである。なお、この「[南部]方言辞典」の項目として『タタリノフ語彙』の会話部の語も収録されている。

A欄	B欄	C欄	D欄	E欄
キリル文字による口語日本語をラテン文字と音声記号に村山が翻字(ラテン・アルファベット順)	仮名文字による文語日本語	キリル文字による口語日本語を片仮名に村山が翻字	原典のロシア語の村山による現代日本語訳	ペトロフによる影印(Петрова 1962)に付された丁番号および表裏
原典のII欄の改変(その1)	原典のIII欄	原典のII欄の改変(その2)(一部、括弧内に対応する漢字・仮名を示す)	原典のI欄の改変	(原典の丁付)

本稿では村山の辞典における各項目の欄表示を左から順にA欄, B欄, C欄, D欄, E欄とする。

欲を言えば、同じ原典II欄の転写だからA欄とC欄を隣り合わせた方が良かったであろう。また、意見の分かれるところであろうが、D欄は元のキリル文字表記のロシア語もあった方が良かったかもしれない。ロシア語原語があった方が疑念が生じたような場合に読者が調べ直すのに便利であろう。(ただ、同書の紙幅的には村山の全5欄が限界である。)

村山七郎(1908—1995)はドイツのマクス・ファスマMax Vasmerの許で比較言語学を学んだ篤学の士である。その学問的射程はアルタイ諸語を始めとして、アイヌ語、南島諸語、日本

15) <http://dedushka-spb.narod.ru/text/petrova-korshunova.html>. (2005年4月時点)

ライフマン1962はオリガ・ペトロフへのインタビュー記事であり、レニングラト(当時)がドイツ軍に包囲された時に彼女は夫と子供を亡くしたことが語られている。しかし、そのような中でも同胞の家に残っている蔵書を守るために彼女(たち)は奮闘していたという。「本というものは、人間の知恵のかたまりなんですからね」という当時の彼女の上司が慰める言葉は心に響く。なお、ペトロフの日本語研究に関する研究の紹介が原1986: 22-23にある。

16) 「そこで私は、この資料を日本の方言研究者たちの利用しやすい形で提供することを思い、露日という原形を根本的に改めて、原書の日本語(後で見るように18世紀前半の南部方言)を見出語にかがける方言辞典に改編することにした。[改行] 原書の日本語はロシア字(キリル字とも呼ばれる)と平仮名で書いてあるが、ロシア字に慣れていない人々を考慮して、ロシア字をローマ字(及び少数の音声記号)に改めた。またローマ字に慣れていない人々の便を考慮して、ローマ字書きと並んで、片仮名書きをも示した」(村山1965: 132)という言葉から判るとおり、村山が自身の学問を律している行動規範はヒューマニズムにあると筆者は思う。『ゴンザの辞典』に情熱を注いだのも、若くして不慮の事故死をとげた村山の令息の姿を同世代で俊秀なゴンザに見て取ったからであろう。人文学があまりにも機械的になり、研究に効率が求められる昨今、村山は我々、人文学に携わる者が範とすべき学究の一人なのであろう。

語の起源、そして日本人漂流民の言語資料の研究と幅広い。ただし、「文献学的研究」と銘打った研究が複数あるにもかかわらず村山の文献学的な操作に物足りなさを筆者は感じる。むしろ、村山の学問は文献資料を用いた言語学なのである。村山1965の中で最も資料の来歴などの文献学的処理が行き届いているのは、『タタリノフ語彙』の章であるが、それはペトロワがロシア・ソ連における伝統的な文献学的検討を十全に加えているからである。ただ、徳川宗賢が村山1963aや同1963c等を「過去文献に乏しい我々[日本語方言の研究者]にはまったく早天の慈雨的資料」(徳川1964:75下)と評するようにロシアへの日本人漂流民の言語に関する村山の一連の研究が日本語方言研究を飛躍的に発展させたことは事実である。

北川 / 佐藤1989は8頁の解説と原典の影印、翻字等からなる。1頁に原典1頁分を縮小した影印と、これを活字化(北川 / 佐藤の用語で「翻刻」)あるいはキリル文字による口語日本語に関しては翻字(同じく「転写」)したものが収録されている。ただし、原典からの直接の影印ではなく、Петрова 1962所収の写真版を復刻したものである。編者たちは「この資料集はA. タタリーノフ [ママ] の『露日レキシコン (辞典)』を全訳したものである。原題 [ママ] は «Лексикон», 1782年 [ママ] にイルクーツクの日本語学校生徒アンドレイ・タタリーノフ [ママ] (Андрея [sic] Татарнинова [sic]) によって編纂されたものである。正式には『露日レキシコン』とでも呼ぶべきものであるが、文中では単に『レキシコン』と称す」(北川 / 佐藤1989:148)と解説しており、「キリル文字とアルファベット体 [ママ] との対応関係は [...] 基本的には村山氏のものに従ったが、一部異なる部分がある。これは翻刻者の解釈を加えることなく、キリル文字からアルファベット [ママ] へ転写したことによる」(北川 / 佐藤1989:152)と翻字の基本原則を示している。これらの北川 / 佐藤1989からの引用においていくつかの点に対して説明を加えて明らかにしておかなければならないことがある。まず、“Татарнинов” という姓のударение (日本のロシア語教育で伝統的に「力点」と訳されるストレス・アクセント) の位置を誤っており、もしこの力点を長音で表記するならば、「タタリーノフ」となる。¹⁷⁾ (本稿では長音表記せずに「タタリノフ」とした。筆者は外国語を片仮名表記する際に、ストレス・アクセントのみによるやや長めの母音を長音で表すことをできるだけ避けている。ラテン語の長母音のように2モーラを形成する場合に専ら長音表記することになっている。) 次に「原題は «Лексикон» とあるが既述のように“Лексикон”のみが標題ではない。また、「1782年に [...] アンドレイ・タタリーノフ [...] によって編纂された」とあるが、1782年に科学学士院の会議に『タタリノフ語彙』が提出されたのであり、作成はそれ以前で、どれ程の時間を費やしたかは不明である。ちなみに、「キリル文字」も「アルファベット」であり、北川 / 佐藤1989が言う「アルファベット(体)」は正確には「ラテン・アルファベット」である。¹⁸⁾

北川 / 佐藤1989の構成は次表の上段のようになる。中段は原典(Петрова 1962収録の影印版)の項目の各欄との対応を示したものであり、下段は村山1965の「南部」方言辞典の項目の各欄との対応を示したものである。

17) Петрова 1962の日本における数少ない書評の一つである岡 / 金本1963、あるいは北川 / 佐藤1989や江口2006では「タタリーノフ」というように力点ударениеの位置を誤っている。対して、村山七郎は「タタリーノフ」と力点を正しく長音表記に反映させている。ちなみに、この日本のロシア語教育で「力点」と称されるストレス・アクセントは日本人にとって曲者であり、母音のやや長めになった長さを強さとともに認識しなければならない。高さに気をとられていると力点の位置を誤ってしまうのである。筆者はロシア語やウェールズ語等を学ぶ際に戸惑った経験がある。

18) 他に、Петроваを「ペトロア」(passim)と仮名表記したり、アンドレイ・タタリノフの原綴りが“Андрея Татарнинова”と生格のままであるのも不可解である。

a欄	b欄	c欄
ロシア語(括弧内にこのロシア語の現代日本語訳)(影印に対応しているので原典の順序を踏襲)	キリル文字による口語日本語をラテン文字に翻字	仮名文字による文語日本語
原典のI欄	原典のII欄の改変	原典のIII欄
村山のD欄(ただし, 村山にはロシア語原語は無い)	村山のA欄	村山のB欄

最後にもう一つだけ評すると、いくら影印であっても縮小してしまえば価値は減じ、前述のとおりロシア語、特に手書き文書では印面が小さいと判別しづらくて読解が困難となるのである。

筆者の研究室に関することで誠に恐縮であるが、過去において2名の学生が『タタリノフ露和語彙』をテーマとして筆者の指導のもとで卒業論文(「特別研究」と称する)を執筆している。それがロゴワ2003と長澤2007である。卒業論文執筆過程においてこの学生たちに研究ノート作りや『タタリノフ語彙』のデータを自身で打ち込む作業を指導しながら彼女たちのこのテーマに対する情熱を目の当たりにした。奇しくもオリガ・ロゴワはロシア人留学生であり、長澤ゆかりはタタリノフの父祖たちと同じ旧「南部」藩領の出身であるという絶妙の動機付けが各々を『タタリノフ露和語彙』に向かわせたのかもしれない。市井に流布しない稿本でありながら、本稿で文献資料として用いたのはささやかながら、二人の著者たちの努力と学問的優先権を示したかったからである。

3. 『タタリノフ露和語彙』における日本語方言

『タタリノフ露和語彙』における口語日本語を村山七郎は「[下北の] 佐井村近辺の [[南部]] 方言」と断定し(村山1963c: 95b), 村山1965ではこの語彙の配列を変えて「[南部]方言辞典」を作成した。ただ、このように判断した経緯は誠に心許ない限りである。村山1963a: 73下では「筆者[村山]には「レクシコン」の方言は荘内方言ではなかろうかという予感がある。[略] この予感が正当であれば、三之助ら十七名が食料品(多分米)を積んで江戸に向けて出帆した港は酒田港であるということになる」と言っているにもかかわらず「[南部]方言」と最終的に結論を下した理由が大いに気になるところである。

実は、一連の村山論文において日本の方言学的な論考はほとんど見出されず、日本語方言に関する議論は、ほぼ全てと言ってよいくらいПетрова 1962からの引用に終始しており、かろうじて村山1963a: 71下-73下において「東条[ママ]操編「全国方言辞典」(東京, 1951年)や『[荘内] 浜荻』を参照しながら、『タタリノフ語彙』の口語日本語と日本語方言を語彙的に比較しているのみである。これに比べペトロワは「橘正一. 東條操. 國語方言学[ママ]. 本州東部の方言」と「橘正一, 方言讀本」そしてポリワノフしか言及していないにもかかわらず、音韻を中心に日本語方言学の豊富な知識に基いて『タタリノフ語彙』の言語がどこの地域の特徴を有した日本語かという真相に肉迫している。村山は語彙の比較を終えた上で、「全体として見て、前にあげた単語が南奥よりも北奥に多く分布していると言えそうである。「久し」「柄杓」が「レクシコン」でfiyaqiおよびfiyaguとして現れるのも「[荘内]方言の語形と通じるものもあるので」, 「レ

クシコン」の言語を青森、秋田、荘内あたりと結びつけることをゆるすであろう」¹⁹⁾ (村山1963a: 73下) というような結論ありきの考証である。この結果が本章冒頭で示した「荘内」方言説となるのである。

前述のように、この直後に村山は「南部」方言（下北の佐井村近辺の言葉）説に転進するが、その理由も「多賀丸船員は徳兵衛の縁者が多かったから、「レクシコン」は佐井村近辺の方言を基盤としている」(村山1963c: 95b) とあるだけで、言語学的な議論は全くといってよいほどなされていない。前に記したとおり、村山は徳川宗賢（および高野明）によって日露の人名比定に関して指摘されたことを明らかにしてはいるが（村山1963c: 94aおよび村山1965: 150, n. 6）、『タタリノフ語彙』の言語に関する示唆を徳川から得たことに関しては、学術文献の類には記されていない。しかし、佐井を含む青森県の地元日刊紙である『東奥日報』に村山は次のように書いている。「私はこの記録〔『タタリノフ語彙』〕を研究して、はじめ酒田あたりの方言を表わしたものと考えていたが、国立国語研究所の徳川宗賢氏が徳兵衛一行の漂流民の言語ではないかという意見を私に述べられ、これがきっかけとなって、ロシア側資料を詳しくしらべたところ、著者アンドレイ・タターノフの父は徳兵衛配下に間違いのないこと、イルクーツク日本語学校の教師たちがみな徳兵衛配下であることを見出したのである。」(村山1963b: ④)

村山はこの後の論考でも特に結論を確たる根拠もなしに導く姿勢はあまり変わらないので、これを批判する目的で佐井を始めとする下北の海運についてまず始めに簡単に述べておきたい。村山の立論が如何に認識不足かが判るであろう。

前述のとおり竹内徳兵衛の多賀丸の積荷は、下北海運の典型的な積出荷である「大豆、昆布、鰯槽」であって「米」ではない。²⁰⁾ 「[下北] 半島の湊から積出すものは南部松（樅）を第一として、昆布、鰯メ槽、大豆などであった」という。(笹澤1962: 175) ロシア資料にある「干した魚」とは魚の「乾物」ではなくて、肥料となるメ槽、干鰯の類であろう。新編『佐井村誌』(佐井村1971-72: 下, 104) も笹澤1962: 98をそのまま引いて、延享元(1744)年の多賀丸の出帆と難破を「イワシメ粕と多賀丸」と見出しを付け、鰯メ槽の江戸送りが既に始まっていたことの証左としている。(ちなみに、佐井も大畑も田名部七湊に数えられる重要な湊であった。(笹澤1953: 15-16および鳴海1977: 44))

このように現地の事情を把握していなければ無謀な結論に向かってしまう危険性もありうる。『タタリノフ語彙』から一例を挙げると、例えば、ロシア語 «вѣтреныны день» (ветренный день) (Лек., 116-I) は、〈風のある(強い)日〉の意であるが、これに対応する日本語は «фінгашино теньки» (フィンガシノ テッキ) 〈東(風)の天気〉(Лек., 116-II) となっている。²¹⁾ これを説明するには、現地の気象情報を入手するなり、あるいは現地に赴くなり、いろいろな手段を講じる必要があるだろう。できれば、タタリノフの往時に遡った情報を得るに越したことはない。例えば、寛政年間(18世紀末)に改訂された『増補 日本汐路之記』の易国間(「異国の間」とある。下北

19) 「柄杓」は本文中の語彙比較には登場せず、次のように注記されている。「〔[荘内]浜荻〕では「ひさく」とあるから「レクシコン」の語形とは異なる。但し、国立国語研究所報告5「地域社会の言語生活」— 鶴岡における実態調査(東京・1953年) 264ページによると現在はヒヤクが多い。二百年前にはヒサク、ヒヤクの両形が行われ、一方は「浜荻」に、他方は「レクシコン」に記録をとどめたのではなかろうか。」(村山1963a: 77, n. 7) 議論の展開に少し無理があるように筆者は思う。

20) 前述のGeorgiの記述による「米、亜麻布そして絹織物」とあるのは想像によるものであろう。

21) П欄の口語日本語を北川/佐藤『レキシコン』165 (b)では“figafino tenki”とするが、1語めの«н»の挿入を見落としてはならない。ちなみに、原典Лек., 116-IIの2語めの4文字め«ъ»は、ペンの勢いでかろうじて判別できる。

半島北岸の湊)の件に「東風悪し、この辺にても日和悪くば、佐井の港へ逃るがよし」(鳴海1977: 7所引)とあり、東から吹きつける強風に航海が左右され、場合によっては難船にも至りかねないことが判るのである。

下北の海運に関しては、『タタリノフ露和語彙』の口語日本語の部分を研究する際に非常に重要な観点となるので後にまた考察する。地域に根ざした視点がこの研究には必要となるのである。

話を『タタリノフ語彙』の言語の問題に戻すと、前述のように村山1963c: 95bには「[「レクシコン」は佐井村近辺の方言を基盤としている]とあるが、この論拠は「多賀丸船員は徳兵衛の縁者が多かったから」(同)というのである。これは真相に接近する一つの側面的な方法ではあるが、竹内徳兵衛(一行)が佐井出身(の者が多かった)ということが判るだけで、『タタリノフ語彙』がどのような言語で書かれているのかということは依然、不明である。

さらに、村山1965: 212にある「[佐井村の]村長、教育長と私と3人で「レクシコン」の日本語を検討したが、お二人は「それは佐井のことばに相違ありません。老人たちから聞いたことばにそっくりです。まるで昔の人に会ったような気がします」と言われた」という叙述は佐井における地元の方言話者の確定的な証言であるかのように見えるが、実はこの発言の当事者の一人である教育長は後日、「村山博士が昭和38年九学会下北調査で佐井に来たとき、私はその言葉は佐井の言葉であると答えた。なぜなら、延享年間、佐井の多賀丸がカムチャツカに漂流し、乗組員が露領シベリアのイルコーツカに住み着いたことが、えぞ草紙や原始謾筆風土年表などに記されてあるからである」(佐井村1971-72: 上, 765)と記しているのである。これではまさに本末転倒であろう。『タタリノフ語彙』の日本語が文語はもとより口語の方も規範的な日本語を志向していることにも、聞き覚えがあるという先入観の一因があるのかもしれない。

繰り返しになるが、船の所有者であり船長である竹内徳兵衛の出身地が判明したことと『タタリノフ語彙』の言語が解明されることは、別の問題であることに注意すべきである。アンドレイ・タタリノフの父親が漂流中に船内で(漂流中に限らず、日常的にも)同乗している船乗りたちと交わしたであろう奥戸、大間そして宮古(いずれも「南部」藩領)の方言の影響、および航海中のいろいろな停泊地での言語的経験、そして父子ともにロシアにおける他の日本人漂流民との接触、ロシアで再び学習したかもしれない日本語教材類の影響(例えばゴンザの辞典や会話書²²⁾等々の複雑な要素が多賀丸の漂流民の言語の中には想定できるのである。

また、『タタリノフ語彙』の言語が仮に「南部」藩領の佐井の言葉から構成されていたとしても、下北の佐井の方言自体が周囲の異なるいろいろな方言的影響を受けている複雑な言語なので、注意深い言語的分析が必要となる。

以下に、『タタリノフ語彙』に収録されている原典第II欄の口語日本語を日本語の方言学的知見を利用して検討していくことにする。

本稿で使用する日本語方言の主に語彙に関する文献資料の略語は次のとおりである。(括弧

22) 例えば、『ゴンザの辞典』では、「богъ 神」(ゴンザ, Лек., 31); 「діаволь 悪魔」(ゴンザ, Лек., 92) は、それぞれ「フォドケ 仏」; 「ガワツパ 河童」であり、『タタリノフ語彙』では、「«богъ» 神」(Лек., 19); «чертъ» 悪魔」(Лек., 926) は、「«фодог» (フォドケ(仏)); «каппа» (カッパ(河童))」である。両者を比較すると、ロシア語に対応する口語日本語が同一であることから、タタリノフが『ゴンザの辞典』を参考にしたことが判る。元となるロシア語は『ゴンザの辞典』の方が宗教的であるのに対し『タタリノフ語彙』は通俗的で、タタリノフあるいはその周辺の人物の知的水準がそれ程には高くないことを示している。また、『タタリノフ語彙』の会話部に関しては、ゴンザの『日本語会話入門』をほぼ全面的に参考にしたことが村山1965: 141-42で明らかにされた。

内で引用する方式他を説明した。）

- 『青森縣方言集』= 菅沼貴一（編）『青森縣方言集』国書刊行会、再刊、1975年。（原著、1936年。旧「南部」領 = 「南部」、旧津軽領 = 津軽、両地域共通 = 共通の表示、頁番号で引用。以下、簡略に記述）
- 『秋田方言』= 秋田縣學務部學務課『秋田方言』秋田：秋田縣學務部學務課、1929年。（頁、上・下の各欄）
- 『岩手方言の語彙』= 小松代融一『岩手方言の語彙』盛岡：岩手方言研究会、1959年。（「旧「南部」領」・「旧伊達領」の別、頁、上・中・下の各欄）
- 『御國通辭』= 南部叢書刊行會『南部叢書』第10冊、盛岡：南部叢書刊行會、1929年、475-522頁。（頁）
- 『鹿角方言考』= 大里武八郎『鹿角方言考』花輪（秋田）：鹿角方言考刊行会、1953年。（頁、上・下の各欄）
- 『鹿角方言考補遺』= 大里武八郎『鹿角方言考補遺』私家、1959年。（頁、上・下の各欄）
- 『鹿角方言集』= 内田武志『鹿角方言集』国書刊行会、復刻、1975年。（原著、1936年。頁）
- 『気仙方言誌』= 金野静一／菊池武人『気仙方言誌』油印、[1964年]。（「語法論」・「語彙」の別、頁）
- 『國語大辞典』= 日本大辞典刊行会『日本國語大辞典』全20巻、小学館、1972-76年。（巻、頁、「一」～「四」の各欄）
- 『国語大辞典二版』= 日本国語大辞典第二版編集委員会／小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』全14巻（1-13巻、別巻）、小学館、2版、2000-02年。（巻、頁、「一」～「四」の各欄）
- 『五戸語彙』= 能田多代子『青森県五戸語彙』私家、1963年。（頁、上・下の各欄）
- 佐藤『方言辞典』= 佐藤亮一（監修）、小学館辞典編集部『標準語引き 日本方言辞典』小学館、2004年。
- 小学館『方言大辞典』= 尚学図書〔徳川宗賢／佐藤亮一（編）〕『日本方言大辞典』全3巻（上／下／別巻）、小学館、1989年。（巻、頁、「一」～「四」の各欄。上・下巻のみ通し頁付）
- 『莊内語及語釋』= 三矢重松『莊内語及語釋 附 莊内方音攷・濱荻』刀江書院、1930年。（頁）
- 『莊内浜荻』= 同上書、77-134頁。（頁）
- 『莊内方音攷』= 同上書、65-76頁。（頁）
- 『津軽語彙』= 北山長雄『津軽語彙』私家、油印、1933年。（頁）
- 『津軽方言地図』= 小倉 肇（編）『津軽方言地図』全2冊、弘前：津軽書房、1988年。（頁。別冊は地図番号）
- 『津軽方言の言語地理学的研究』= 小倉 肇（編）『津軽方言の言語地理学的研究』弘前：弘前大学教育学部国語学研究室、1988年。（頁）
- 東條『全国方言辞典』= 東條 操（編）『全国方言辞典』東京堂、再版、1952年。（初版、1951年。頁、上・中・下の各欄）
- 東條『分類方言辞典』= 東條 操（編）『標準語引 分類方言辞典 附 全国方言辞典補遺』東京堂、11版、1962年。（初版、1954年。頁、上・中・下の各欄）
- 『東北方言辞典』= 森下喜一『標準語引 東北地方方言辞典』桜楓社、1987年。（頁、上・下の各欄）
- 『遠野方言誌』= 伊能嘉矩『遠野方言誌 附 閉伊地名考』郷土研究社、1926年。（頁）
- 『西和賀の方言』= 高橋春時『岩手西和賀の方言』水沢：岩手出版、1982年。（頁、上・下の各欄）
- 『八戸地方方言辞典』= 寺井義弘『青森県南・岩手県北・八戸地方方言辞典 — 古語出典付 —』私家、1986年。（頁、上・中・下の各欄）
- 『野邊地方方言集』= 中市謙三『野邊地方方言集』三元社、1936年。（頁、上・下の各欄）

『物類稱呼』= 吉澤義則(撰)『校本 物類稱呼 諸國方言索引』立命館出版部, 1933年, (頁, 上・下の各欄)

明治書院『方言大辞典』= 平山輝男他(編)『現代日本語方言大辞典』全9巻(1-8巻, 補巻), 明治書院, 1992-94年, (巻, 頁, a・bの各欄)

『山形県方言辞典』= 山形県方言研究会『山形県方言辞典』山形: 山形県方言辞典刊行会, 1970年, (頁, 上・下の各欄)

『山形県方言集』= 山形縣師範學校『山形縣方言集』山形: 山形縣師範學校, 1933年, (頁)

LAJ = 国立国語研究所『日本語地図』全6巻, 大蔵省印刷局, 1966-74年(縮刷版, 1981-85年), (http://www5.kokken.go.jp/dash4/laj_map_main.html) (地図番号)

VLI = *Vocabulário da língua de Iapam com declaração em Portugues*, Nangasaqui, Collegio de Iapam da Companhia de IESVS, 1603. (『日葡辞書』 亀井 孝(解題), 勉誠社, 1973年)(丁, 表 = r / 裏 = v, a・bの各欄)

『タタリノフ語彙』は下北の方言資料として権威のある方言辞典にも採用され、小学館『方言大辞典』では「近世の資料」の「※051」番として「レクシコン(タターリノフ)1732[ママ]」が「原資料および出典番号一覧」(小学館『方言大辞典』(上), 序(15), 二)に掲げられており、実際に「下北」方言の資料の出典として少なからず使用されている。しかし、これは言語的均質性の点で非常に大きな問題を孕んでいる。他の日本からの漂流民による当時の言語資料としては、パラスを除けば、「※052 1772年露国旅行記(ゲオルギ)1775」, 「※055 日本語辞典(レザーノフ)1800年頃」, 「※103 光太夫伊勢白子資料1791」, 「※136 日語会話入門(ゴンザ=ボグダーノフ)1736」, 「※137 露日辞典「漂流民の言語」(ゴンザ=ボグダーノフ)1736」, 「※138 簡略文法(ゴンザ=ボグダーノフ)1738」が挙げられている。(同, (上), 序(15), 二-四) この中で『タタリノフ語彙』とゲオルギの資料は言語の特定が困難であるとの理由で筆者は余程の注記を施さない限り、このような類の辞典に使用すべきではないと考えている。(『タタリノフ語彙』である「※051 レクシコン(タターリノフ)」の作成年代を「1732」年としているが、これは「1782」年の単純な誤りだとしても、半世紀の違いは言語資料を扱う際の開きが大きいに、前述のように「1782年までには完成していた」という意味しか持たない数字なのである。)

辞典に登録するには危険な用例を小学館『方言大辞典』から、ここでは一例だけ指摘しておく。「かいしき(搔敷)」の項目で「⑤ 料理人」(小学館『方言大辞典』(上), 487, 四)の義の用例として「陸奥下北」と地点説明があり、『タタリノフ語彙』をその出典としている。これは «кайшйгй» (カイシギ) (Лек., 645-II (п. 286)) のことであり、対応するロシア語が «поварь» (повар) 料理人 (Лек., 645-I) であるためであろうが、意味的な矛盾が存するため、村山1965: 171, n. 27では「誤りであろう」と注記されている。つまり、タタリノフの誤解による訳語である可能性が極めて高く、「かいしき」の特殊な用例とはなりえないのである。『タタリノフ語彙』には他に同音異義語(現時点では、このように称しておく)と思われる «кайшйгй» (カイシギ) (Лек., 459-II (п. 21a)) がロシア語 «лопата» 鋤 (Лек., 459-I) の訳語として収録されているので、小学館『方言大辞典』の編纂にあたり『タタリノフ語彙』の体系的な追究がなされるべきであった。²³⁾

資料自体の間違いとして「ひじ[肘]」の項目において「(《ひじちり》)下北 ※051」(小学館『方言大辞典』(下), 1999, 一)となっているが、原典では «фужичйри» (Лек., 460-II) なので「フジチリ」が正しい。単純な引用間違いならば救われるが、『タタリノフ語彙』に対する理解不足によるものならば、問題である。

誤解のないようにここで筆者の主張を強調しておく、『タタリノフ語彙』を用例として挙げることに全てが悪いわけではない。好例として一つ挙げるならば、「капарй шймашта」（Лек., 864-II）および「капарй шймасть」（Лек., 865-II）の「капарй」（カパリ）〈溺れる〉²⁴⁾は、同辞典では「かわはいり [川入]」の「② 水におほれること [略]（《かぱり》陸奥下北 ※051）」（小学館『方言大辞典』（上）, 643, 一）として引用されている。同辞典においてもこの義の用例として挙げられている野辺地方言（青森県旧「南部」藩領）では「かっぱり」（『野邊地方言集』25下）で、他にも岩手県の旧「南部」藩領の方言で「カッパトル」〈おほれる, 水におちこむ〉（『岩手方言の語彙』旧「南部」, 45中）である。『東北方言辞典』101下では「おほれる [溺]」の義で岩手県の「南部」方言だけが「カッパトル」（おそらく『岩手方言の語彙』から引いたもの）であり、他の東北諸方言から孤立しているかのように見える。しかし、「水に入る～水に落ちる」等の語義も含めれば青森県五戸方言の「カエパリ」〈川や堰などに過っておこちること〉（『五戸語彙』44上）、秋田県鹿角方言の「かっぱり」〈水中ニ墜落スルコト, 必スシモ川ト限ラス池ニテモ沼ニテモ〉（『鹿角方言考』67上）や岩手県西和賀方言の「かっぱ（とる）：かっぱり：かっぱえり」〈過って川に入ること〉（『西和賀の方言』36下）といった旧「南部」藩領で行われる方言は言うに及ばず、岩手県気仙郡（旧伊達藩領）で「カワペアリ」〈投身自殺者。過って川の中に転落した人〉（『気仙方言誌』語彙, 53）、青森県の津軽方言で（「南部」方言とともに）「カッパリ kappari」〈水に顛落して濡れること〉（『青森縣方言集』共通, 62）や秋田県仙北郡および河辺郡において「カッパリ」〈水に落ちること〉（『秋田方言』305下）というように東北北部に広く見られる。すなわち、『タタリノフ語彙』の「капарй」（カパリ）は、「（北）東北方言」の資料となり得るだけで、後に詳述するように「下北方言」の言語資料と断定するわけにはいかないのである。

さらに問題を深刻にさせているのは、（おそらく小学館『方言大辞典』を介して）『国語大辞典二版』に用例として『タタリノフ語彙』が大々的に採用されていることである。『国語大辞典』を改訂する際に『国語大辞典二版』における方言の記述内容を充実させており、前述の「かいしき」の項目において『国語大辞典』4, 247, 四では『タタリノフ語彙』からは用例を採っていないが、『国語大辞典二版』3, 203, 一―二では『タタリノフ語彙』を資料として用例を採用している。また、『国語大辞典』では項目として採り上げられていなかった「かわはいり [川入]」が『国語大辞典二版』3, 1185, 二で新たに項目として立てられ、『タタリノフ語彙』から用例が採られているといった次第である。

果たしてこれらの権威ある辞典が示すように『タタリノフ語彙』の言語は「下北」方言の資料となり得るのであろうか。また、村山1965で説くように18世紀の佐井の言葉を記録した文献として位置付けることができるのであろうか。柴田1967は村山1965の書評であり、村山が根拠もなく『タタリノフ語彙』の言語を「南部」方言、中でも佐井の方言と結論付けることに対して

23) 明治書院『方言大辞典』第7巻の口絵に、偶々、p. 21aの写真が掲載されており、上から9項目目が「カイシギ」の後にあたる。これに続く「方言に関する歴史的文献V〈外国人の記述〉の解説」にこの箇所の活字化されたロシア語と「日本音声学会が若干の修整を加えた」（明治書院『方言大辞典』I, 凡例3a）音声表記による口語日本語等が一覧表となっているが、原典の文字判読に誤りがみられる。『タタリノフ語彙』の標題紙（Лек., p. 16）冒頭にあるロシア語文の日本語訳も解説の中で示されているが、明らかに誤訳である。ちなみに、ロシア語「любовь」〈額〉（Лек., 461）を口語日本語で「номйсо」（ノミソ）〈脳味噌〉とするなどタタリノフ自身の誤訳も見られる。

24) 対応するロシア語は「утопнуть」（Лек., 864-I）, «утопнеть」（Лек., 865-I）でともに不定詞は「утонуть」であり、「тонуть」と同義語で、語義は「沈む, 溺れる」である。北川/佐藤『レキシコン』228(a)は、ともに「薄くする」という語義で解釈しているが、「утопить」と混同しているのであろう。これは誤りである。

暗に批判をしているにもかかわらず(柴田1967: 89上-下), 九学会連合による下北調査の中で柴田が行った調査の一つである「肱」の方言分布を引き合いに出して(同, 88), «фужичйри» (フジチリ) (Лек., 460-II) という語の18世紀における存在は, 「一般に言語地理学で推定する方言の“地層”は, 相対的な古さしか明らかにしえないが, ここでは絶対的な古さをも明らかにすることができた」としているが(柴田1967: 89上), 「肱」という語の方言形の伝播も推定であり, 『タタリノフ語彙』に記述された言語が下北の佐井の言葉であることも証明できていないことを考えれば, 柴田の考察は早計と言わざるを得ない。同様に書評である日野1965: 75上でも無批判に村山の「佐井村の方言」説を紹介していることに批判精神の欠如を憂慮するのである。

そこで, 本稿では以下, 『タタリノフ語彙』の言語を音声と語彙の面から検討していくことにする。「明治生まれのお年寄りが話す方言は江戸時代の方言と大差がないとも言われている」(佐藤『方言辞典』「はじめに」3頁) というような言葉を額面通りに受け取る訳ではないが, 現在, 利用し得る限りの各地の方言資料を江戸時代の著述も含めて使用しながら『タタリノフ語彙』の言語を考察してみたい。しかし, 紙幅との関係もあり, 本稿で提示できる材料は『タタリノフ語彙』における一部の音声特徴や語彙であり, 記述も簡略にならざるを得ないことを予め陳謝しておきたい。

音声・音韻の面では, Перрова 1962: 15-20で「東北諸方言」の音声特徴として述べられているものを筆者がさらに整理および追加した上で主なものを取り出して下記のようにまとめた。

- 1) 母音iとeの混同 2) juとjoの混同 3) 中舌母音iの存在 4) ハ行子音 = φ 5) ヒ = φ 6) 「濁音前鼻音」の存在 7) 母音間のカ行・タ行等の子音の有声化 8) 合拗音k^w, g^wの存在 9) キ(タ) = kʃ(ta) 10) シとス, チとツ, ジ = ゼとズ = ツの対立

この中で1), 3), 6), 7) は東北方言全般に見られる現象である。「1) 母音iとeの混同」では «майдарй» (マイダリ) <前掛け>²⁵⁾ (Лек., 330-II) は「マエダレ [前垂れ]」であり, «омайгадано» (オマイガダノ) <あなた方に> (Лек., 136-II) は「オマエガタノ [お前がたの]」の転である。「3) 中舌母音iの存在」とは, キリル文字“ы”で表され, 非円唇・中舌母音 [i] (または [ɨ]) という発音に近く実現されたと想定し得る音声を含む口語日本語の語が『タタリノフ語彙』にいくつか記述されていることを指し,²⁶⁾ «сыйгва» (ス・イッワ) <西瓜> (Лек., 11-II), «цъдзы» (ツ*ヅ* [通詞]) <通詞> (Лек., 693-II) などであるが, この文字(音)を有する語はごく少数である。筆者の教唆によって調べた長澤2007によると「ウ」を表す場合, キリル文字表記として“y”を使用した語は294語であるのに対し, “ы”を使用した語はわずかに12語であるという。この中舌母音“ы”は, 全て歯擦音“c” [s], “з” [z], “ц” [ts] の後に現れるということに注意すべきである。ちなみに, 『日葡辞書』では «tçũji» (ツージ) (VLI, 247r, a) という形と共に «tçũzu» (ツーズ) (VLI, 251v, b) の形も見られ, 『タタリノフ語彙』の「ツ*ヅ*」がどちらの語形と比定し得るのが問題である。

「6) 濁音前鼻音の存在」とは, 濁音(有声閉鎖音)の前に調音点を同じくする鼻音が伴うことを言い, «усангй» (ウサンギ) <兎> (Лек., 297-II), «ижинго» (イジッゴ) <苺> (Лек., 326-II), «тембу-

25) 北川/佐藤『レキシコン』183(a)では「防材柵」と訳しているが, これは“запань”とした誤解で, 誤りである。

26) 本稿では, “ы”で示される音声を片仮名表記する際に仮名の右肩に[*]を付けて表記する。なお, この文字で記される音声について詳しく述べる紙幅的余裕がないので, 詳細は省略する。

гуро) (テムブグロ) <手袋 [ミトン]> (Лек., 734-II) などがある。これは、16世紀末から17世紀始めにかけて記録されたキリシタン資料における日本語と同じで、例えば “Nangasaqui” (VLIの標題紙の刊記) などの表記と同一であり、ジュアン・ロドリゲスが「D, Dz, Gの前の母音に関する第三規則」Regra terceira da vogal, ante, D, Dz, G (Rodriguez 1604 : II, 177v-178r= 1969 : 354-55) とした当該子音に先行する母音の鼻音性の問題と軌を一にする。ただし、『タタリノフ語彙』と同時代人のゲオルギがタタリノフと同じ「南部」藩領の漂流民、即ちタタリノフの父親サノスケと共に多賀丸に乗船していた日本人たち (タタリノフが学んだイルクツクの日本語学校の教師である) から採録した資料²⁷⁾には «Usangi» <兎> (Georgi, 6) という『タタリノフ語彙』と同じ語形がある一方で, «Atschinar» (アチナル [足軽]) <兵士> (Georgi, 8) (『タタリノフ語彙』では «ашйгару» (アシガル) (Лек., 756-II) という「ガ」ではなく「ナ」を有する語形も見られる。「アチナル」は、おそらく「語中のガ行子音は [略] 鼻音の [ŋ] になっているので、前鼻音を伴うことがない」(明治書院『方言大辞典』1, 79a (川本栄一郎)) という現在の青森方言と同じで [ŋa] であろう。また, LAJ, 2の「カゲ (蔭) の -G- の音」では、山形県の極北と新潟県境, LAJ, 1の「カガミ (鏡) の -G- の音」においてはLAJ, 2の地点に加えて山形県の宮城県境付近でガ行の非鼻音が見られる他は東北方言で全てガ行鼻音となっている。ゲオルギ資料は、この時期には「濁音前鼻音を前添するガ行子音」から「ガ行鼻音」への移行が既に始まっていたことを示しているのであろう。²⁸⁾ (ちなみに、村山1965 : 207-08では「濁音前鼻音」と「ガ行鼻音」の区別がなされておらず、やや問題がある。) 「7) 母音間のカ行・タ行等の子音の有声化」の例は数多くあり, «агаи» (アガイ) <赤い> (Лек., 440-II), «джйгогу» (ヂゴグ) <地獄> (Лек., 6-II) などである。

「4) ハ行子音 = φ」は現在、この発音が行われない宮城県の方言でも、かつては発音されていたことが知られており、仙台では「古老や御国浄瑠璃に」(橋1934 : 8) 残っていた。即ち、古くは東北方言全域で存在が認められた音である。『タタリノフ語彙』では, «фадо» (ファド) <鳩> (Лек., 176-II), «фйнгаши» (フィンガシ) <東> (Лек., 114-II), «фув» (フユ) <冬> (Лек., 280-II), «федй» (フェビ) <蛇> (Лек., 327-II), «фоне» (フォネ) <骨> (Лек., 382-II) など数多く見られる。

「8) 合拗音k^w, g^wの存在」というのは、本来、字音語において唇音化された軟口蓋閉鎖音が今でも発音されているか、または過去において発音されていたことであり、『タタリノフ語彙』では, «кваннонь» (クワンノン) <天使> (Лек., 4-II); «ягванъ» (ヤッワン) <ティーポット, やかん> (Лек., 935-II)。合拗音は岩手県ではかつてかなり一般的だったが、盛岡や一関ではこの種の音はすでに聞かれなくなっている。(本堂1982 : 249) LAJ, 3「カジ (火事) のKA-の音」, LAJ, 4「スイカ (西瓜) の-KAの音」, LAJ, 5「ガンジツ (元日) のGA-の音」, LAJ, 6「シヨオガツ (正月) の-GA-の音」の4地図では小さな異動はあるものの、確定的に言えることは、宮城県や山形県

27) ゲオルギの日本語資料は、「大体において耳で聞いたところを、ローマ字で [略] 記録したと見られる」(村山1965 : 207) と言われているが、筆者が検討したところ、「キリル文字で書かれた資料も参考にした」と思われるいくつかの疑義がある。例えば, «Aiva» <黍> (Georgi, 9) は “*айва” をそのままラテン文字化して, “Aiva” としたのであろう。ロシア語とドイツ語では発音様式が少し異なり、ロシア語では [wa], ドイツ語では [fa] で、元の日本語も [*アイファ] ではなく, [*アイワ (粟)] が妥当ではなからうか。«Gado» <鳩> (Georgi, 7) は明らかにキリル文字による表記 “*гадо” をラテン文字化したものである。元の日本語の語頭の子音 (おそらく [*h] 音で、語全体では [*hado]) はロシア語ではこのように成り得ても、ドイツ語では決してあり得ないからである。(例えば、ドイツ語地名の “Hamburg” は、ロシア語で “Гамбург” となる。) 少なくともゲオルギは「鳩」に関しては直接、漂流民から聞き取ったものではない。ちなみに、「アチナル」はまさしく耳から聞き取ったものであろう。

28) これはガ行に鼻音と非鼻音の対立が無い地域出身の話者がガ行鼻音を「ナ行」と聞き誤ることに似ている。

の方言では合拗音k^w, g^wが見られないということである。山形県では庄内地方で明治時代にある程度、合拗音が認められ、小国地方では老年層に見られるが、内陸には「全く痕跡すらない」という。(明治書院『方言大辞典』1,98a(加藤正信)) (江戸時代の庄内方言の発音を記した氏家剛太夫天爵(天保5(1834)年没)の『莊内方言音攷』には庄内の「ク^ッ」音を江戸の「カ」音と対比させているのに対し(『莊内方言音攷』75), 同じ庄内の藩士、堀季雄(享保19(1734)年—天明6(1786)年)の『[莊内] 浜萩』では「観音」を「かんのん」と記している。(ただし、これに続く注釈にあるように「くわん[のん]」と発音すべきなのかもしれない。)(『莊内浜萩』133) 宮城県(仙台市)でも「合拗音ク^ッは全く見られない」(明治書院『方言大辞典』1,90b(加藤正信))という。

[5] ヒ = φ の例として、«втозьно» (フツゾノ) <統一的な, 一つの> (Лек., 239-II); «втоно» (フツノ) <人々> (Лек., 443-II) がある。北東北方言に広く見られ、橋正一は「秋田縣ではヒをフといふ場合が多い。[略] ヒとフの混同は岩手縣や青森縣にもある。」と言っている。(橋1934:9) 各地の方言語彙を繙くと、«ふと» <ひと(人)> (『秋田方言』472下); «ふとつ» <一つ> (同); «フト(コ)» <人> (『岩手方言の語彙』旧「南部」, 156下); «フト fūto» <人>, «フトツネ fūtodzinē» <一緒に> (『青森縣方言集』共通, 124); «futogasanē» <一揃い> (『津軽語彙』90) とある。加賀田1999は青森県北津軽郡中里町(当時)の老人層の談話を分析した研究で、録音資料とそれを文字化した資料が付録となっている。この資料の中から「ヒ」が「フ」に変わっている語を拾ってみると、«フトツツ» <ひとつつ>; «フト» <人> が見られる。²⁹⁾ また、山形県でも「ヒ」を「フ」と転ずる方言がある。例えば、東田川、西田川で«フト» <人> (『山形県方言辞典』538上); 東置賜、東田川で«フトツ» <一つ> (同) である。(『山形縣方言集』280-81では«ふと futo» <人> は「庄内」であるが、«ふどづ fudozu» <一つ> では「庄内、村山、置賜」となっている。) 村山1965:148では『莊内語及語釋』52-53を引いて「フィ」と「フ」の混同を挙げている。ただし、この時点では村山は既に『タタリノフ語彙』の言語に関する「莊内」方言説を棄て、「南部」方言説を展開しているのである。

[9] キ(タ) = kʃ(ta) に関しては、『タタリノフ語彙』において«кшта» (クシタ) <北> (Лек., 593-II) という語があり、³⁰⁾ 語頭の「キ」が口蓋化して、極めて強い摩擦を伴う子音を有していたと考えられる。この「キ」の口蓋化は、東北方言全域に広く見られるが、南東北では口蓋化の程度が進み、破擦音「チ」に近くなる。この音声と同様の観察報告が平山(編)1982:399aの「きた(北)」の項目で«キタ [kʃita]» (秋田、青森、八戸) のように記述されている。また、大橋1997は青森県金木(と宮城県山本)の「キ」を音響分析して金木方言(津軽方言)の語頭における「キ」の子音部は[kʃ] であるとした。(同18)³¹⁾ 即ち、これらはポリワノフの説く「kʃta ← kita」であり(ポリワノフ1976:96)、この母音をポリワノフは「より正確には²i」で、「音節形成的な²iに近い」(同94)としている。筆者はこの語に東北方言特有の母音の中舌化と子音の口蓋化の相関を見出すのであるが、このことに関しては後述する。ただ、『タタリノフ語彙』において語頭の「キ」を有する他の語(例えば、«кй» (キ) <あらゆる樹> (Лек., 229-II)) も多くあり、上記の語のみで判断することに多少の逡巡はある。しかし、«кшта» (クシタ) <北> (Лек., 593-II) の他に「シ」の子音の強さも『タタリノフ語彙』(およびゲオルギ資料)の特徴として挙げられるのである。極めて強い摩擦を伴う子音を有する「シ」として«кшта» (クシタ) <下から, 下部>

29) «ワ コノ アズギミシ ケシャフトツツ コンダ ヤイダズヤ ワツツカズツ クツテミンデケ» <私 この 赤飯 今朝 ひとつ 今度 焼いたのよ 少しずつ 食べてみてちょうだい>; «ヒヤ モツテキタフト アッバー» <それじゃ 持ってきた人(が) いるでしょ> (加賀田1999).

30) この語の他に、«кшано кадже» (クシヤノ カヂェ) <北の風> (Лек., 141-II) がある。これは、おそらく“* кштано кадже”の書き誤りであろう。

(Лек., 358-II) がある。この「シ」は、時に舌面が持ち上がり、硬口蓋との間で閉鎖音を形成したことを示していると考えられる。ゲオルギ資料の «Атсинар» (アチナル [足軽]) <兵士> (Georgi, 8) の «tsch» や «Ksinus» (クスイヌス) <Georgi (村山), 206では「誤記であろう」としているが、これは筆者の推定では「洲根子(岬)」で、松前の東岸にある (Georgi, 4) および «Ksikokun» (クスイコクン) <四国> (ebd.) の «ks» も極めて強い摩擦を伴う子音を有する。

〔2〕juとjoの混同〕に関しては、«юмй» (ヨミ) <矢を射る弓> (Лек., 475-II) のような例がある。Петрова 1962: 16において「山形県の方言」と地名を挙げて指摘された特徴である。確かに、橋 1934: 5に「山形縣莊内では、士族以外は、ユをヨと言ふ」として「ヨミ (弓)」が挙げられており、『山形縣方言集』347でも庄内で «よみ yomi» <弓>, さらに『莊内語及語釋』53で「ゆ」と「よ」は「土 [= 士] 族以外はすべてヨといふ」と指摘されている。しかし、青森県津軽地方には «ヨミ» <弓> (『東北方言辞典』466上); «jomī» <夢> (『津軽語彙』107) があり、また、岩手県遠野では «ヨオダズ» <夕立> (『遠野方言誌』116); «ヨンベ» <昨夜> (同, 118); «フヨ» <冬> (同, 97), 八戸を中心とする青森県南部や岩手県北部で «よぎ» <雪> (『八戸地方方言辞典』236下) という語もあるのど庄内方言のみに見られる特徴ではないのである。

音声・音韻の面で『タタリノフ語彙』の最たる特徴は「10. シとス, チとツ, ジ = ズとズ = ツの対立」の保持である。今日の東北方言全域に見られる顕著な現象として、これらの対立が融合してしまった「一つ仮名化」があるが、『タタリノフ語彙』はその融合以前、正確には、融合直前の状態を示しているのである。例として、«шйзгана» (シヅガナ [静かな]) <おとなしい> (Лек., 773-II); «сузуме» (スズメ) <雀> (Лек., 151-II); «чйсай (кава)» (チサイ (カワ) [小さい (川)]) <小川> (Лек., 720-II); «цубагура» (ツバグラ) <燕> (Лек., 466-II); «ножи» (ノジ) <虹> (ニジ) (Лек., 713-II); «незумй» (ネズミ) <鼠 [ネズミ]> (Лек., 503-II); «кужйра» (クジラ) <鯨 [クヂラ]> (Лек., 367-II); «кузу» (クズ [靴]) <長靴> (Лек., 768-II) を挙げておく。これらから明らかにシ [ʃi] とス [su], チ [tʃi] とツ [tsu], ジ [ʒi] とズ [zu], ズ [ʒi] とツ [zu] を区別していることが判る。「シ」と「ス」および「チ」と「ツ」の区別は村山1963a: 70下-71上および村山1965: 145-46で述べられているが、柴田1967: 87下-88上では、語によっては「混同」が始まっていることを指摘した。(例えば, «цыды» (ツ*ツ* [通詞]) <通訳> (Лек., 693-II) や «цызуми» (ツ*ズミ [堤]) <運河> (Лек., 442-II) などである。) ただし、柴田は「下北地方」におけるの言語変化としているが、この地域的確定は不可能であり、「東北方言」(後に本稿で結論付けるように「北東北方言」)での事象とすべきである。村山1965: 147で「ジとズとは区別的に表記されない」と指摘したとおり、上記の例においてジもズも共に [ʒi] で、ズもツも共に [zu] であり、この時期にジとズ、そしてズとツは融合していたと考えてもよいが、ただ、«надзу» (ナヅ) <夏> (Лек., 448-II), «яджи» (ヤヂ) <沼, 湿原> (Лек., 56-II) などもあることに留意すべきである。

この10)における変化の兆候と上記3)で考察した中舌母音 [i] の存在を考え合わせると、母音の中舌化によって「一つ仮名」化が促進されたと推論できるであろう。『タタリノフ語彙』の言語は「一つ仮名方言」になる以前の東北方言の姿を留めており。東北方言において「一つ仮名」化がまさに起こりつつある時期の文献と言えるのである。そして、この約1世紀後に出現する「南部」藩領の農民で三閉伊一揆の指導者の一人である三浦命助が盛岡の長町牢内で記した

31) 宮城県山本方言(宮城方言)における同様な分析結果を [tʃ] としているが、(大橋1997: 18) サウンド・スペクトログラム(同17)を見る限り、明瞭なexplosive intensityが見受けられず、[tʃ] として解釈することには無理がある。このサウンド・スペクトログラムの印象から、筆者は、寧ろpalatal stopsではないかと考える。イタリアやスイスのロマンス語圏の方言学で誤って [tʃ] と記述されるこの音は、“γ0g” から “γ0h” までというように調音点が広いので注意が必要である。(Jespersen 1913: 42-43)

文書（『獄中記』）は「一つ仮名」が確立した方言で書かれている（川本1972）のである。

語彙に関しては今までに既に、いくつかの語彙に関する論述をしたことでもあり、また、紙幅の関係もあるので対象を絞ることにする。村山1965：149-50では「語彙について見れば、本書に掲載されているものは1744年ごろの南部方言で用いられていたことは疑いない。[略]たとえばゲオルギは「いなご類」[正確に言えば「バッタ」であろう]を表わす単語としてGathaniガッターニを挙げている。これはgattangiガッターギに近い発音を示すのであるが、東条[ママ]操編全国方言辞典（176ページ）によれば「がたぎ」（はたはた。ばった）は岐阜県土岐郡・三重県度会郡・和歌山県新宮に分布し、物類称呼には「がたき」が駿河の方言として挙げられ、また「がたぎ」は「蝗」の意味では岐阜県本巣郡・尾張・三重・奈良県吉野郡・和歌山県東牟婁郡に分布していて、東北地方の名称は挙げられていない。しかるに、佐井港出帆の漂流民がこのことばを知っていたとすれば、18世紀前半にはこのことばは南部方言にも存在していたことが明らかである」と言う。この村山の記述は全て東條操（編）『全国方言辞典』からの引用で、おそらく『物類称呼』は見えていないであろう。語義や地名の順序も地名表記も東條の辞典のままである。だが、今はこのような瑣末な議論は脇に置いておく。村山の議論の展開には論理の飛躍があり、『タタリノフ語彙』の言語的性格は未だ誰も明らかにはしていない上に、漂流民がロシアで使っていた語は一つ残らず彼らの故郷の方言にもあると考えるのは余りにも単純すぎる。ただし、村山にとっては幸いにもゲオルギが記録した「Gathani」（ガタニ）〈バッタ（蝗）〉（Georgi, 6）は村山の思いもしない展開で興味深い事実を我々に提供してくれる。

本稿で既にいろいろと考察して蓄積した知見を基に筆者の推定も加えてこの語の復元語形（音形）を大胆に推測してみたい。既に述べたようにゲオルギ資料の「g」はロシア語のキリル文字「r」を介した日本語のハ行であり、「n」はガ行鼻音〔ŋ〕であった可能性が高い。『タタリノフ語彙』の言語はシラビーム方言であったと筆者は推測する。これは日本人の名前を記したロシア語文書から判断したもので、例えば、「Санноска」と記述されている「サノスケ」の音声をより正確に仮名で書き表すと「サンノスケァ」だったであろうと推定できる。これらを総合すると、ゲオルギが記録した「Gathani」を『タタリノフ語彙』と等質の言語として復元した形は「ハッターギ」または「ハッターギ」となるのである。

何とこの語は『タタリノフ語彙』とほぼ同時代の東北方言、詳しく言えば盛岡藩（「南部」藩）領の城下町、盛岡で寛政2（1790）年に藩士、服部武喬が盛岡の方言を記録した『御国通詞』に「いなはったぎ」（蝗）（『御国通辞』489）として記録しているのである。さらに、村山が目を通した東條『全国方言辞典』を注意深く見れば、「はったぎ」の項（東條『全国方言辞典』658下）に「②蝗。いなご。南部・秋田県山本郡・岩手・宮城。③蝗などの総称。ばった。岩手・宮城」と記載されているのである。そもそも、『物類称呼』の「蟻蚶」の項にも「奥州仙臺にて○はつたぎと云」（『物類称呼』37上）とある。また、東條『分類方言辞典』の後半は「附 全国方言辞典補遺」となっており、「はたぎ」の項には「①殿様ばった。津軽。②蝗。いなご。青森」といった青森県での使用が記されている。やはり「全てを調べ尽くす」というのが文献学を始めとする人文研究の基本であろう。自らの戒めにもしたい。

『東北方言辞典』368上において「ばった（飛蝗）」は、「ハタギ」（青森県津軽）、「ハッターギ」（岩手県旧伊達藩領）があり、他の方言語彙を調べると、青森県で「ハタギ hatanji」いなご。バッタの類。（『青森県方言集』共通, 116）；津軽で「hatanji」〈飛蝗〉（『津軽語彙』84）；五戸で「ハタギ」〈ばった（虫）の総称〉（『五戸語彙』145下）、「ハッターギ」〈蝗〉（同, 147下）；野辺地で「ハタキ」いなご（『野辺地方方言集』80下）；八戸を中心とする地方で「はつたぎ」〈蝗〉（『八戸地方方言辞典』170上）；秋田県鹿角で「ハタギ」〈昆虫。ばつた。飛蝗〉（『鹿角方言集』161）；岩手県西和賀で「はたぎ、はつたぎ」いなご（『西和賀の方言』17下）；気仙で「ハッターギ」〈バッタ〉（『気仙方言誌』語彙

128) といった方言語形が記録されている。

真田1973は東北地方の「蝗」の仲間に関する方言分布をまとめたものであり、四つの類型に分類している。ゲオルギの記述³²⁾だけでは蝗の種類も不明で、異なる種類があるとしたら、それらのそれぞれに異なる名称があるのかも判らないが、ゲオルギ資料には他の名称は見当たらないので、今は一応、漂流民の言語では蝗類に対して「ハッタギ」の一語しか有しないと仮定すると、この言語における「蝗」という語は真田の示す最古の段階にあると言える。

『タタリノフ語彙』には日本語にもロシア語にも語義が不明な語、あるいは誤解されている語も少なからずあり、どちらの言語の語を解釈するにも、もう一方の言語の十分な理解が必要である。「бэжй」(バジ) (Лек., 15-II) という語は、村山も北川/佐藤も「こうのとりの」と解釈している。(村山「辞典」158 (E) ; 北川/佐藤『レキシコン』157(a) それにはロシア語欄が「айсть» (айст) (Лек., 15-I) であるため、これを訳して「コウノトリ」としたのである。しかし、日本語諸方言において「ばじ」で鳥類を表す語は見当たらない。ロゴワ2003はこの疑問を見事に解決したのである。即ち、「ダーリの辞典には「айст」という単語のもう一つの意味が書いてある。それは魚の名前である。現代語ではやはり使わないのである。そして広辞苑には「はち」[ママ]の意味の一つはマグロの一種、メバチの別称だということが書いてある。それでタタリノフの「айст」は、おそらくその魚の意味として捉えた単語である」(ロゴワ2003) とロゴワはダーリのロシア語辞典を参照しながら考えたのである。ロゴワのこの語に対する記述は、ここまでで、ダーリの辞典等の注釈も無いので、ここでは筆者がロゴワ2003を補って説明したい。ダーリのロシア語辞典の“айсть”の項目 (Даль 1903—09 : т. 1, 19a) には「大型の渡り鳥」の他に「カスピ海の魚のайсть」があり、「細身のコクチマス仲間」が語義として掲載されている。ロゴワは一般辞典である『広辞苑』に日本語「バチ」を探ったが、ここでは方言に対する言及の多い他の辞典を繙くと、『国語大辞典』に独立した項目として「ばち」があり、「魚、めばち」として、仙台と東京で使用される方言であることが判る。(『国語大辞典』16, 276, 四) 『国語大辞典二版』では他の語義・語源の語とともに「ばち」の項目にまとめられたものの、初版の内容をやや充実させて、「魚、めばち (目撥)」の語義で、宮城県、仙台市、東京都の方言と記されているのである。(『国語大辞典二版』10, 1172, 一) 結論を性急に出すわけにはいかないけれども、このような新たな視点、即ち深いロシア語の理解や更なる日本語方言の研究から『タタリノフ語彙』の研究は進展すると筆者は考えている。

以上、『タタリノフ語彙』を考察した結果をまとめると、母音 i と e の混同、中舌母音 i の存在、ハ行子音 = φ、「濁音前鼻音」の存在、母音間のカ行・タ行等の子音の有声化が現在の東北方言と同様に見られる一方で、現在では東北方言において一般的な「一つ仮名」が未だ現れないものの、その発生期としての兆候が見られることが判った。また、合拗音 k^w, g^w の存在や「ヒ」= φ、「キ」の口蓋化 (キ(タ) = kʃ(ta)) などの北東北方言に顕著な特徴や、ju と jo の混同のようなくつかの北東北方言に見出すことができる現象があることも判った。これらを総合的に判断すると『タタリノフ語彙』の言語は現在の「北東北方言」に類似していると言える。

ここで、竹内徳兵衛一行の「南部」漂流民のうち徳兵衛自身も含めて何人かの船員の出身地で

32) ゲオルギ『1772年におけるロシア国旅行覚書』の「ガタニ (= ハッタギ)」の箇所を以下に引用しておく。「蝗に関しては、茶色いものと緑色のとの2種類がある。それぞれ2ツォル [約5センチメートル] の長さである。特に稲の「畑」にとっては、両方とも同じく破壊的である。彼らはそれらを減らす術を知らない。」„Von Heuschrecken (Gathani) haben sie 2. Arten, eine braune und eine grüne. Jede wird 2. Zoll lang. Beyde sind, besonders für ihre Reißfelder, gleich verderblich. Sie wissen sie nicht zu verringern.“ (Georgi, 6)

あり、難船した多賀丸が出帆した港である佐井または大畑がある下北の方言について簡単に触れておくべきであろう。下北の言語に関して此島正年は「日本民族のこの地方への進出は津軽よりもはるかに遅れたようである。[略] しかもその進出は徐々に各方面からなされたらしく、言語においては津軽方言に比すると地域毎の差がかなりめだっている。すなわち三戸郡から上北・下北と北上するにつれて少しずつ差が生ずるし、また太平洋の沿岸地帯と内陸とでまたかなり異なる。かくて下北方言は、いちおう南部方言に属しながらかなりの異色を持っている」(此島1965:53-54)と言い、更には「狭義の南部方言からは、はみ出る面も少なくない」(此島1982:223)とまで言い切り、その例として、1)「蛙(一般)」を表す語が上北や三戸では「ゲァロ」であるのに対し、下北では「ビッキ」であり、むしろ津軽の一部[津軽南部]と通じ、2)「降りる」が上北・三戸以南が「オチル」であるのに下北にはこれが無く、3)動詞の敬語法で「南部」方言の「オ～アル」ではなく、「～サイ」・「～サマエ」という尊敬命令があることなどが挙げられている。1)に関してはLAJ, 218³³⁾「かえる(蛙)」の方言分布図により容易に確認でき、易国間と岩屋の「KAERU」は除外して、川内で「BIK-(K)I」と並存する「GE(E)RO」以外は下北全域で「BIK(K)I」であり、南に隣接する三八上北地方の「ゲァロ」系や津軽北中部や秋田県北部の「モッケ」系と異なるが、それらの更に南に展開する青森県の津軽南部および岩手県や秋田県中南部以南と一致するのである。津軽地方のうち弘前、黒石、五所川原を中心とした地域における「蛙」の方言分布は『津軽方言の言語地理学的研究』98にて概観でき、ごく大まかに言えば、平賀～弘前～目屋を結ぶ線より北が「モッケ」の領域で、これより南に下北と同じ「ビッキ」が分布することが判る。(『津軽方言地図』175-89, 別冊, 地図052以下に詳しいが、ここでは割愛する。)2)に関しては柴田他1967:187(第11図)に「odziri」の分布図があり、ほぼ上北地方以南の分布となっていることが判る。3)は此島1965:58-59および大嶋1990:435-37に解説があるのでそちらに譲る。此島は「本方言 [= 下北方言] は文法的にも、南部方言を中軸としながら、その上に津軽・南奥・北海道との関連を示し、さらにはまた独自のものを含んで、複雑な様相を呈している」(此島1967:168b)と結論付けている。

下北の中でも船長、竹内徳兵衛の出身地であるが故に村山七郎によって『タタリノフ語彙』の言語の来歴地と同定された下北西通の佐井の方言はどのような言語なのであろうか。此島1967:168b-69bでは隣接する津軽・「南部」両方言に見られない下北特有の7項目の文法事項を挙げて、8地点で該当する項目を比較した結果、田名部では6項目、川内では4項目、脇野沢では3項目、大畑では5項目、尻屋では2項目、小田野沢では1項目、大間では3項目、佐井では7項目全ての該当となった。下北における言語の不統一性を垣間見ると共に佐井の方言が津軽方言とも「南部」方言とも異なる特殊性を有していることが明確に判るのである。さらに九学会連合による下北共同調査の報告である柴田他1967:185a-87aでは佐井から牛滝までの半島西岸および川内を中心とした半島南岸、そして川内川に沿うような(海路を別として半島南岸と西岸を結ぶ主要幹線路である)川内と佐井を結ぶ地域で買物圏、通婚圏、方言境界意識などと共にいくつかの語の分布が他の地域と対立しており、これらの地域が津軽地方と密接に結びついていることを示している。

柴田他1967:200a-bは下北の方言調査の結論として、1)「どの項目についても、一般に方言量が少なく、方言の種類も少ない」、2)「截然とした分布を見せる項目が少ない」、3)「田名部

33) LAJの下北における調査地点は次のとおりである。(市町村名等は当時のもの)大間町大間、佐井村佐井字大佐井、同長後字牛滝、風間浦村易国間字桑畑、大畑町大畑字東町、東通村岩屋字往来、同蒲野原字石持、同小田野沢字畑浦、川内町川内字家之辺、同字川内、田名部町田名部字赤平、むつ市奥内、脇野沢村脇野沢字本村。

は方言については放射の中心地ではない。田名部以外にもそういう中心地は見当たらない」、4)「下北地方は南部藩に属し、南部方言の地域とされるが、下北地方の一部は明らかに津軽である」、5)「西と南がたえず津軽の方言を受け入れる窓になって、そこから徐々に東の方に広がっていった」としている。また、2)と3)は「この地方が「島」の性格を持っていることを意味すると思う。新しい語の波はまわりの海を渡って押し寄せているからである」とも言っている。即ち、筆者が思うには、下北半島の西岸に位置し、良港として栄えた佐井の言語は絶えず他の方言から改新を被る言語であり、特に海運が盛んな江戸時代においては九学会の調査時の比ではなく、積極的に他の地域から言葉を取り込んでいたと考えられる。

本章の総括として言えることは、『タタリノフ語彙』の言語は「汎北東北方言」的性格を有する言語であるということである。このことを積極的に評価するならば、北東北（今後の研究によっては、南東北や越後・北陸などへの展開も視野に入れて）のいろいろな方言的要素を含んだ言語を基盤としているということであり、消極的な評価をするならば、地点を特定できないほど未だ説明されていない要素が少なくないということである。いずれにせよ現段階での軽率な判断だけは避けたい。北東北方言とは山形県の庄内方言を含む（小林1944:57）岩手県の旧「南部」藩領、秋田県、青森県の諸方言であるが、『タタリノフ語彙』の言語を（ペトロワが暗に示唆していたかもしれない）「庄内方言」のみに特定する根拠も見出せない。ましてや挙証の点で問題のある村山の説く「南部」方言や「佐井の方言」も全面的に否定するわけではないが、積極的に肯定することもできない。

今後、『タタリノフ語彙』に関する研究を発展させるためには是非とも過去における人間活動の実相に対する検討も含めた「生きた」研究が必要であることを強調しておきたい。例えば、本稿でも既に何度か言及した江戸時代における海運に関する事実の蓄積も他の土地からの言語的影響を考える上で必須の作業である。西回り海運の運航によって先ず下北に乗り込んで来たのは酒田、若狭、敦賀、三国の海商であり（鳴海1977:9）、また、「能登半島の港は佐井にとって、檜材の取引先であったし、庄内地方は米、酒類の買付先であった。羽前大山は銘酒の産地、善宝寺は航海する船の祈願所であった」（佐井村1971-72:上,766）という。これらの諸地方の言葉と『タタリノフ語彙』との比較も何らかの成果を得ることができるのではないかと筆者は考えている。

林業に依存してきた下北は、漁業面でも他の沿岸地方とは異なる事情があり、「柚作業に従事して漁撈を顧みる者が寡つた。依て八戸、宮古邊の漁船が入込んで漁撈した。八戸の漁師が大間、佐井の海に潜ぐつて鮑を捕り、宮古邊の漁師も同様來つて漁撈した」（笹澤(編)1937:109)という。ここで想起したいのは、宮古出身の伊兵衛と長助という多賀丸に同乗していた漂流民の存在である。即ち、現在、行方不明の露和小語彙を作ったパノフとトラペズニコフである。今回、筆者は敢えて「南部」方言領域である宮古への言及を控えてきた。アクセントや二つ仮名で方言研究者を幻惑させる岩手県沿岸の方言がロシアに渡っても我々を魅了する存在だとしたら・・・興味は尽きない。詳しくは別の機会に譲りたい。

現在の佐井を始めとした下北の状況からはあまり想像できないかもしれないが、江戸時代においてこの湊町に確実に存在した栄華は、「佐井湊は夙に良泊として知られ廻船輻湊」（笹澤1953:20）し、「湊は商家軒を連ね妓樓は紅燈を掲げて客を招ぎ賑ふた」（同）という記述から窺い知ることができる。まさに下北の諸湊は日本全国から人々が参集し、さまざまな言葉が飛び交う活気ある湊街であり、本州内陸の田園的な地方とは異なった言語的経験を積んだのかもしれない。

小林1944の巻末第2図は彩色された「東北地方幕末大名領地畧圖」であり、『日本言語地図』

の参考地図VIも同様な「近世藩領図(1664年・寛文4年)」(LAJ, Introductory Map VI)である。藩領の区画図が言語地図に付された意味は、日本語の方言は藩境をもって一つの方言区画を形成するという日本の方言学の大前提がある。しかし、これは下北のように海上交通が盛んであった、あるいは海上交通にしか交通手段を依存できない地域には必ずしも当てはまらない概念なのである。『タタリノフ語彙』の研究は局地的な方言の研究のみならず、日本の方言学を見直す新しい契機になるかもしれない。

4. おわりに

柳田國男は大正5(1916)年頃に津軽半島西岸にある十三湊を訪れ、北前船が就航していた頃に比べて、「それにしても驚くのは、古来音に聞えた十三の湊の変わり様である」と嘆いた。(柳田1918=1997:720)それから1世紀を経た今日、柳田が慨嘆すること自体も我々には理解が難しくなっている。江戸時代に深浦、十三湊を経て下北の諸湊に来航する船はさまざまな品物と共に多様な文化をもたらした。上方の洒落た品がその名称と一緒に運び込まれては、流行と衰退を繰り返していたであろう。さまざまな言葉もまた、いろいろな土地から下北の湊街に入り込んだのではなかろうか。十三湊に限らず現在の下北においても往時の繁栄を思い描くのは至難の業である。しかし、人文諸学は、あらゆる知見を駆使して往時の姿を浮かび上がらせる力を秘めているのであり、方言学もまた然り。本稿では『タタリノフ語彙』という資料をもとにして当時の東北で、下北で、そして海を越えたロシアで人々が語る言葉に耳を傾けることに重点を置いた。

結論として、『タタリノフ語彙』は「北東北方言」の資料とは成り得ても「南部」方言や、ましてや「下北方言」の資料と断定するわけにはいかないということになったが、今日の東北方言の最大の特徴と言われる「一つ仮名」、即ち歯擦音に後続するイ段とウ段の融合に関して『タタリノフ語彙』は、その融合以前、正確には、融合直前の状態を示していることが判った。これにより(北)東北方言において「一つ仮名」が生じた時期を18世紀半ばとすることができるのである。さらに、母音の中舌化によって「一つ仮名」化が開始されたことも判明した。

また、『タタリノフ語彙』の言語がシラビーム方言として「わたり音」が強いこと、即ち前後の鼻音の影響を受けやすく、前後の声帯振動の影響を受けて有声化や無声化が生じやすく、前後の環境により口蓋化あるいは中舌化が起きやすいといった特徴を有するのである。これは東北方言と同じであり、中央の日本語とは音声構造的観点からすれば異なる言語なのである。おそらくエウゲニ・ポリワノフや柴田武は、このことを直感的に理解していたと思われる。

前述のとおり、『タタリノフ語彙』が提出された科学学士院の1782年10月24日の会議には学士院会員としてパラスが、準会員としてゲオルギが同席していたのである。その10年前に「南部」漂流民の「日本語」を記録しているゲオルギは、その時にどのような表情で、どのような批評をしたのであろうか。筆者としては往時に思いを馳せて考えてみたい。

いろいろと資料を提供してくれたオリガ・オレゴヴァ・ロゴワさんとデジタル資料を作成してくれた長澤ゆかりさんに心から感謝を捧げます。津軽の中里方言を研究するという筆者の計画が未完に終わってしまい、加賀田直美さんにはお詫びすると共に貴重な方言資料を残してくれたことに感謝いたします。

東北地方の方言的感覚が希薄な筆者に仙台方言を中心とした東北方言を丁寧にご教示して下

さった菊地悟氏に感謝いたします。そして、何よりもこの研究の契機を与えて下さった大野眞男氏にも謝意を表します。

«Большинство слов в книге – на диалекте
Намбу и много простонародных слов.»
— Кацурагава Хосю 1978 : 237.

参考文献

(第3章「『タタリノフ露和語彙』における日本語方言」の略語一覧で記述した文献は、ここでは省略した。)

- Даль В.* 1903—09 Толковый словарь живого великорусского языка, в 4 томах, третье изд. под редакцию И. А. Бодуэна-де-Куртене, С.-Пб. – М., Издание Т-ва М. О. Вольфъ.
- Кацурагава Хосю* 1978 Краткие вести о скитаниях в северных водах («Хокуса монряку»), Перевод с японского, комментарий и приложения В. М. Константинова, Москва, Изд-во «Наука».
- Петрова О. П.* 1962 «Лексикон» русско-японский Андрея Татаринова, Издание текста и предисловие О. П. Петровой, Москва, Изд-во Восточной Литературы.
- Петрова О. П.* 1963 Лексикон российско-японский. — В кн. : Труды двадцать пятого международного конгресса востоковедов, Москва 9—16 августа 1960 г., т. V, Москва, Изд-во Восточной Литературы, стр. 363—68.
- Сгибнев [ъ] А.* 1868 Обь обученіи въ Россіи японскому языку. — Морской сборникъ, т. XII, стр. 55—61.
- Файнберг Э. Я.* 1960 Русско-японские отношения в 1697—1875 гг. Москва, Изд-во Восточной Литературы.
- Dostojewsky, M.* 1930 „Rußlands Vordringen zum Stillen Ozean und seine erste Berührung mit Japan,“ *Japanisch-deutsche Zeitschrift*, N. F., 2. Jahrgang, Heft 6, S. 125-38.
- Georgi, Joh. Gottl.* 1775 *Bemerkungen einer Reise im Rußischen Reich im Jahre 1772*, Bd. I, St. Petersburg : Kayserl. Academie der Wissenschaften.
- Jespersen, Otto* 1913 *Lehrbuch der Phonetik*, Leipzig / Berlin : Teubner, zweite Aufl.
- Rodriguez, Iôão* 1604 *Arte da lingua de Iapam composta pello Padre Iôão Rodriguez Portugues da Côpanhia de IESV diuidida em tres livros*, Nangasaqui, Collegio de Iapão da Companhia de IESV. (島 正三(編)『ロドリゲス 日本大文典』文化書房博文社, 1969)
- 青森県文化財保護協会 1960 『原始謄筆 風土年表』上巻, 青森 : 青森県文化財保護協会.
- アルパートフ, ウラジーミル・ミハイロヴィッチ [*Алпатов В. М.*] 1992 『ロシア・ソビエトにおける日本語研究』下瀬川慧子 / 山下万里子 / 堤 正典(訳), 東海大学出版会. (原刊 1988年)
- 江口泰生 2006 『ロシア資料による日本語研究』大阪 : 和泉書院.
- 大嶋 孜 1990 「第1章 言語 第1節 方言」下北文化誌編集委員会『下北文化誌』むつ : 青森県高等学校PTA連合会第39回実行委員会, 435—39頁.
- 大橋純一 1997 「東北方言における /ki/ の地理的・年代的諸相と展開 — /k/ 子音と /i/ 母音との関連性に着目して —」『言語科学論集』(東北大学文学部言語科学専攻), 1号, 15—26頁.
- 岡 一男 / 金本源之助 1963 「[書評] ベトローワ教授編著 A・タタリーノフ[ママ]「露日辞典」』『国文学研究』(早稲田大学文学部) 27集, 153頁下段—154頁下段.
- 岡本柳之助(編) 1898 『日魯交渉北海道史稿』無尽風月書屋.

- 外務省 1884 『外交志稿』 國文社。
- 加賀田直美 1999 「津軽中里方言の研究」 岩手大学人文社会科学部（地域文化基礎研究講座）特別研究。
- 川本栄一郎 1972 「幕末の『獄中記』に見られるズーズー弁とガ行鼻濁音」 『國語學』 第91集, 52-65頁。
- 木崎良平 1991 『漂流民とロシア 北の黒船に揺れた幕末日本』 中央公論社。
- 北川誠一／佐藤和之 1989 「タタリーノフ[ママ]『露日レキシコン』」 『文化における「北」』 (昭和62・63年度 [弘前大学] 特定研究報告書), 弘前: 弘前大学人文学部人文学科特定研究事務局, 147—253頁。
- 北村一親 2005 「18世紀のアンドレイ・タタリーノフ露和語彙集の研究 (第1部)」 『アルテス リベラレス』 (岩手大学人文社会科学部) 76号, 1—12頁。
- 此島正年 1965 「下北方言語法考」 『弘前大学人文社会』 第35号, 53—65頁。
- 此島正年 1967 「下北方言の文法」 九学会連合下北調査委員会 『下北 — 自然・文化・社会 —』 平凡社, 復刊, 1989年, 162—69頁。
- 此島正年 1982 「青森県の方言」 飯豊毅一／日野資純／佐藤亮一 (編) 『講座方言学 4. 北海道・東北地方の方言』 国書刊行会, 213-36頁。
- 小林好日 1944 『東北の方言』 三省堂。
- 佐井村 1971-72 『佐井村誌』 全2巻, 佐井 (青森): 佐井村役場。
- 笹澤魯羊 (善八) (編) 1937 『佐井村誌』 田名部 (青森): 下北新報社。
- 笹澤魯羊 1953 『宇曾利百話』 大畑 (青森): 下北郷土会。
- 笹澤魯羊 1962 『下北半嶋史』 大畑 (青森): 下北郷土会, 増補3版。
- 真田信治 1973 「東北地方における「いなご」と「ばった」の方言分布とその解釈」 『国語学研究』 (東北大学文学部「国語学研究」刊行会) 12号, 23-35頁。
- 柴田 武 1967 「[書評] 村山七郎著「漂流民の言語 — ロシアへの漂流民の方言学的貢献 —」」 『國語學』 第68集, 84—91頁。
- 柴田 武／加藤正信／加藤貞子／川本栄一郎／井上史雄 1967 「下北方言の分布」 九学会連合下北調査委員会 『下北 — 自然・文化・社会 —』 平凡社, 復刊, 1989年, 175—200頁。
- 杉本つとむ (編) 1986 『大槻玄沢・志村弘強 環海異聞 本文と研究』 杉本つとむ／岩井憲幸 (解説), 八坂書房。
- 高野 明 1971 『日本とロシア — 両国交渉の源流 —』 紀伊國屋書店。
- 橋 正一 1934 「本州東部の方言 — [前編] 東北方言 —」 橋 正一／東條 操 『國語方言學 本州東部の方言』 明治書院。
- 徳川宗賢 1964 「国語学界展望 方言 — 語彙 —」 『國語學』 第57集, 73—78頁。
- 長澤ゆかり 2007 「18世紀の露日語彙集における日本語方言の研究」 岩手大学人文社会科学部 (人間情報科学コース) 特別研究。
- 鳴海健太郎 1977 『下北の海運と文化』 弘前: 北方新社。
- 原 求作 1986 「ソビエトにおける日本語研究・日本語教育の現状」 『日本語学』 5巻11号, 19—25頁。
- 飛田良文 1977 「ロシア学資料」 『国語学研究事典』 明治書院, 781頁下段—83頁上段。
- 日野資純 1965 「書評 村山七郎著『漂流民の言語』 — ロシアへの漂流民の方言学的考察 —」 『國語と國文學』 (東京大学国語国文学会) 昭和40年11月号, 73—76頁。
- 平山輝男 (編) 1982 『北奥方言基礎語彙の総合的研究』 桜楓社。
- ボリワーノフ, E・D [Поливанов Е. Д.] 1976 「東北方言の母音」 『日本語研究』 村山七郎 (編訳), 弘文堂, 94—98頁. (原著1918年)
- 本堂 寛 1982 「岩手県の方言」 飯豊毅一／日野資純／佐藤亮一 (編) 『講座方言学 4. 北海道・東北地方の方言』 国書刊行会, 237-69頁。
- 村山七郎 1963a 「ア・タターリノフの「レキシコン」の東北方言について — オ・ベ・ベトロワさんに与える —」 『國語學』 第52集, 64—77頁。
- 村山七郎 1963b 「ソ連で発見された下北の方言」 『東奥日報』 (青森) 夕刊, ① 昭和38年7月24日4面; ② 25日2面; ③ 27日4面; ④ 29日4面。
- 村山七郎 1963c 「ア・タターリノフの「レキシコン」の会話編」 『國語學』 第55集, 89—97頁。
- 村山七郎 1964 「220年前の南部藩, ロシアの資料から」 『東奥日報』 (青森) 夕刊, ① 昭和39年4月18日4面; ② 20日4面; ③ 21日4面; ④ 22日4面; ④ [bis] 23日4面。
- 村山七郎 1965 『漂流民の言語 — ロシアへの漂流民の方言学的貢献 —』 吉川弘文館。
- 村山七郎 (編) 1985 『ゴンザ編, A. I. ボグダーノフ指導 新スラヴ・日本語辞典 日本版』 井桁貞義／輿水則子 (協力), ナウカ。
- 柳田國男 1918 = 1997 「津軽の旅」 『柳田國男全集』 第3巻, 筑摩書房, 1997年, 720—23頁. (原刊 1918年)

- 吉田常吉(編) 1965『最上徳内著 蝦夷草紙』時事通信社.
- ライフマン, エ [Рейман Е.] 1962「日本を愛する人 日本研究家オリガ・ペトロワ女史のこと」『今日のソ連邦』1962年19号, 13—14頁.
- ロゴワ, オリガ [Рогова О. О.] 2003「タタリノフによる露日『語彙集』」岩手大学人文社会科学部(地域文化基礎研究講座)特別研究.

